

艦 これの世界に引きこ
もりの青年がやってくる
そうですよ？

因幡凛空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二次元美少女及び艦これが大好きな、コミュ障且つ勉強もスポーツも出来ない引きこもりの青年、加藤リク。

彼はコンビニから帰る途中、車に轢かれそうになった老人を救うも、代わりに自分が轢かれて死んでしまった。

死後、少女の声に導かれるように目を開けると、そこに艦これのキャラ、プリンツ・オイゲンの姿が。彼女から突然「私達の世界を救う勇者になってください！」とお願ひされたリクは、そのまま艦これの世界に連れて行かれてしまう……。

だがその艦これの世界は何かが違う……。それもそのはず、その艦娘達は深海棲

艦以外の勢力とも敵対していたのである。

これはいまいちパツとしない青年リクが、艦船が美少女化した存在である艦娘と共にその二つの勢力に立ち向かっていく物語である……。

※この物語は筆者の妄想です。

初投稿なので語彙力皆無ですが暖かい目で見てくださいお願いします……

基本的に投稿ペースは遅め。深海棲艦以外の敵も登場する、艦娘が明らかにチートな能力を持つている事がある等、とにかくなんでもありなのでそれが嫌な方はすぐに回れ右です。

1 / 11 追記

タグに関しては増減する可能性があります。報告するのが遅れて申し訳ございません。

1 / 14 追記

評価する際は絶対とは言いませんが、良かった点や悪かった点を感想欄にて述べてもらえるとありがたいです。ないならないで構いませんが。

1 / 24 追記

タグの深海棲艦以外の敵を第三勢力に変更しました

4 / 3 追記

あらすじを少し変えました。

目次

序章 死亡そして転生

プロローグ

第1章 新しい人生編

1話 新たな人生の幕開け

2話 訳あり鎮守府とプリンツの謎

10

3話 YAGGY

4話 浜風と鹿島

5話 浦風と二人の秘密

6話 島風と朝潮

7話 心構え

8話 食堂へ

9話 最後の自己紹介

第2章 動き出す勢力編

10話 準備

11話 演習そして庭園

12話 第三勢力の正体そして模擬戦

13話 初めての出撃

14話 フラグシップ

15話 統率者

16話 海の襲撃者

17話 夜の戦場 前編

18話 夜の戦場 後編

19話 総力戦 前編

53

59

67

75

89

106

115

126

137

149

161

47

42

36

31

25

17

24話	ただの日常	217
23話	任命	208
22話	信頼	200
第3章	活発化する二大勢力編	
21話	総力戦 後編	193
20話	総力戦 中編	176

序章 死亡そして転生

プロローグ

「ふう……。コンピニに行くてくるか……」

俺の名は加藤リク。大学入試でつまずいて不合格になり、進路が決まらないまま高校を卒業して以降は部屋で自堕落な生活を送っている。二次元美少女をこよなく愛し、頭も悪い、身体能力も悪い、コミュニケーション能力もないキモオタ、要するに引きこもりだ。俺は何の才能も持たない自分に絶望し、二次元に逃げ込んでいる。こんなどうしようもない奴はこの世にそうそういないだろう。

そんな俺だが、趣味はブラウザゲームをすること。その中でも一番好きなのが艦隊これくしょん、通称「艦これ」という戦略シミュレーションゲーム。実在の艦艇を擬人化した存在、艦娘という少女が正体不明の敵、深海棲艦と戦うというものだ。艦これを始めて1年経つが、イベント海域限定でドロップする艦娘が充実しており、何人かはレベル90代に到達している。

朝起きてから艦これにログインして任務を消化しながらレベリングをし、飽きたら動画を見たり別のゲームをしながら時間を潰す毎日……。だがそんな日常がある日突然、

終わりを迎えることになる……。

それは昼食を買うためにコンビニに行った時だ。買い物を終えた俺は帰宅途中、道路で車に轢かれそうになった老人を庇った結果、代わりに車に轢かれて死んでしまったんだ。

今思えば馬鹿な話だぜ。ダメダメな俺がなんで見ず知らずの老人を助けたのか。あのまま無視していれば今頃死なずに済んだのに、なんて愚かなことをしてしまったのか、未だに分からない。今頃気づいても遅い。

こうして、俺は短すぎる生涯に幕を下ろした。

「起きてください……起きてください！」

死後どれくらい経っただろうか……？突然少女らしき声が聞こえてきたためふと目を開けてみると、そこに耳あたりで鎖のような髪留めでおさげにしている、金髪碧眼の可愛らしい女の子がいた。

「目を覚ましましたね！うふふ！」

「君は誰だ……？」

目を覚ますや否やとつさに名前を尋ねるが、よく見るとこの子見覚えがあるぞ？

「私はプリンツ・オイゲンと申します！」

プリンツ・オイゲン!?まさか、本当にプリンツちゃん本人なのか?夢じゃないよな?そう思い、俺は頬をつねる。

「夢なんかじゃありませんよ。あなたは本来事故で亡くなるはずだった老人の身代わりになって亡くなっただんですから」

そうか……。俺はコンビニから帰宅する途中、車に轢かれそうになった老人を救った結果、代わりに俺が轢かれてこの世を去っただっけな……。夢なわけないか……。気を取り直して、ここがどこなのかを問おう。

「ここはどこなんだ?教えてくれプリンツちゃん」

「ここは不慮の事故で死んでしまった人がたどり着く空間、分かりやすく言えば死後の世界ですね」

死後の世界……。まあ当然か、俺は死んだんだから……。つとここが死後の世界なのは分かっている。俺が一番疑問なのは、なぜここにプリンツちゃんがいるかだ。俺を膝枕してるといふ謎のシチュエーションつきで。

「あのさ、君ってなんでここに居るの?しかも俺を膝枕してるし……。どう考えても不自然なんだが?」

「私はあなたを迎えにここに来ました!だから、今からリクさんを私達の世界に案内し

ます！そこで、私達と一緒に世界を救う勇者になってほしいのです！」

何言っているんだこの子は？というか、なぜ俺の名前を知っているんだ？わけが分からん。どう考えても現実的ではないその言葉と状況に、頭の中がこんがらがりそうだ……。とりあえずいつまでも彼女の膝を枕にしているのは気が引けるので、ヒョイツと立ち上がった。

「あなたのことは存じていますよ！何せ、いつも私達のゲームをプレイしてくれてるんです！当然じゃないですか！」

まるで意味が分からんぞ!?確かに俺は毎日艦これをプレイしていたが、だからって彼女が俺のことを知っているなんて理解不能なんだが!?

「ほらほら、行きましょ！優しい勇者、加藤リクさん！」

頭が混乱して戸惑いを隠せない俺を横目に、プリンツちゃんは立ち上がるや否や俺の手を掴んでこっちこっちと子が親の手を引っ張るように走り出した。しかも俺が優しい勇者だつて？別に俺は轢かれそうになった老人を歩道に突き飛ばしたただけだぞ？優しくなんか……ない。

まあそんなことはさておき、一応彼女にこれから向かう世界がどういう所なのか聞いてみた。一応……な。

「一応聞くけどさ、君が言う世界ってどういうところなの？」

「……そういえば私こうやって男性の手を引っ張るのやってみたかったんだよね！」
「ええ……」

あどけない表情ではぐらかすプリンツちゃん。だが俺には分かる。この子は艦これのキャラクター、プリンツ・オイゲンだ。彼女が言う世界なんて、安易に想像がつく。

「着きましたよりクさん！」

「……やっぱりな」

プリンツちゃんに連れられてやってきたのは、俺の予想通り……

艦隊これくしょんの世界だった……

第1章 新しい人生編

1話 新たな人生の幕開け

前世での人生を短くして終えてしまった俺、加藤リク……。

隣ではプリンツちゃんがりすっかりと俺の左手を掴んでいた。俺は半ば強制される形で、彼女によってこの世界に連れてこられた。

「今日からここがあなたの暮らす世界です！」

「ここが俺の新たな人生を歩む事になる世界か……」

すげえ……本当に艦これの世界にやってきたのか……。興奮と緊張が交差する……。

「この道をまっすぐ進めば鎮守府に着きますから早く行きましょう！」

「そうだな」

俺は緊張しながらも、プリンツちゃんと一緒に歩を進めた。

「見えてきました！」

「おお」

しばらく歩いていくと、やがて鎮守府と思われる建造物が見えてきた。あそこが今後の俺の拠点となる場所だろう。こうしている間にも、俺の心臓は鼓動を早めてきた。

「では、早速中に入りましょう!」

「ちよつと待つて。誰か出てくるぞ?」

やがて正門の扉が開き、中から金髪ロングストレートの美しい女性が出てきた。

「あ、ビスマルクお姉さまだ!」

プリンツちゃんは咄嗟に出てきた女性に抱きつく。

「あら、おかえりなさい」

「ただいま!」

間違いない……この人は戦艦ビスマルクだ!やばい……本人を前にして心臓がバツクバクだ……。彼女がいるってことは、他のドイツ艦もいるのだろうか……?」

「突然飛び出して行っちゃうから、死後の世界に行ってきたのね」

「そうだよ!」

「どうせ、あの事を言った後にこの世界を救うとかお願いしたから断られたんでしょう?」

「違うよ!今回は……」

「あら?その人は?」

「どうやら俺に気づいたらしい……。心を落ち着かせろ……。落ち着かせるんだ俺！」

「この人は加藤リクさん！死後の世界に行ってみたら見つけたから連れてきたの！この世界を救う勇者になってほしいって言ったら快く承諾してくれたの！」

「今回はOKだったみたいね」

「うん！」

「ど……。どうも……。加藤リクと……。申します……」

「というかいきなり私達と一緒に世界を救う勇者になってほしいってお願いされて、承諾の有無関係なく強引にこの世界に連れてこられたんだが!?そんなことは置いといて、俺が名前を名乗ると、ビスマルクさんはニコツと笑みを浮かべた。

「そうなの。私はビスマルク。この子の義理の姉よ。よろしくねリク君」

「ど……。どうも……。よろしく……。お願いします……」

「もうリクさんったら緊張しすぎです」

「緊張のあまりしどろもどろになりつつも、ちゃんと自己紹介が出来たぞ！家族以外の人とまともに会話するのは中学卒業以来だから、自己評価としては最高だ。俺個人としての意見だけど……」。

「それじゃ案内するわ。着いてらっしやい」

「行きましようー！」

「そうだな」

こうしてビスマルクさんの案内の下、鎮守府の中に足を踏み入れる。プリンツちゃん
と手を繋ぎながら……。

2話 訳あり鎮守府とプリンツの謎

鎮守府前でドイツ艦、ビスマルクと出会ったリクは、彼女の案内で内部へと足を踏み入れた。

中に入ると、そこにいた何人かの艦娘の視線が突き刺さる。

プリンツちゃんと手を繋いでるというのもあるが、それ以上に俺が入ってきたことが怪訝そうだった。

「皆俺のこと見てる……警戒しているのかな？」

「ここには男性がいないから、あなたがとても珍しいのですね。私もあなたみたいな人は珍しいから」

「そうなんですか」

「まあ……ね」

男性がいないということは、提督がいないということなのか？ いや、提督が男性とは限らないから、女性提督かそれに準ずる艦娘がいるのだろう。

「ここってなんか、隔離されてる感じがしません？」

「そうかしら？」

ここに来た時から薄々感じていたのだが、妙に寂しい感じがするんだよね……。外界から隔離されてるっていうか……。

「あなたが言う隔離されている感じはしないけど、敵の襲撃を受けやすいってのはあるかな」

「敵というと？」

「深海棲艦は当然として、それ以外の邪悪な存在ね」

「邪悪な存在？」

なんかここ、俺が知っている艦これの世界と何か違うぞ？深海棲艦以外の邪悪な存在が鎮守府を襲撃するとは。

「すごいでしょ？」

「すごいって言われても……」

ここの艦娘達はよくこんな敵襲が多い鎮守府で暮らしていられるな……。こんなところで俺は生活して行けるのか……。？すぐにでも死にそう……。

「なんだか不安になってきた……。敵襲が多いこの鎮守府で俺は暮らして行けるのだろうか……？」

「心配しなくても、あなたには私がついてます！それにここの艦娘達を侮らないほうがいいですよ？」

「そうね。皆戦闘経験豊富だから慣れるまでは彼女たちに頼りなさい」

「俺が守られる側になってる……」

まあ、艦娘は深海棲艦の手から海を取り戻すべく戦っている。それはすなわち、人類は艦娘に守られてるということだ。今思えばなんら不思議なことではない。しかもずぶの素人かつ戦闘経験皆無のこの俺が彼女たちに守られるのは必然なことなのだ。異世界ものでよくあるチート能力を持って転生したわけでもないしさ。

「あ、そういえば……」

「ん？どうしたの？」

「俺、ずっと引つかかっていたことがあるんです」

ここで、艦これの世界にきた時から疑問に思っていた事を切り出した。それは、なぜプリンツちゃんやんが死後の世界にいたのかということ。それに加え、プリンツちゃんやんがどうやってあそことこの世界を行き来しているのかということ。ビスマルクさんの言っていたあの事という単語も気になる。

「実は……」

「あなたが言いたいことは分かるわよ」

なるほど、それなら話が早い。

「彼女はこの世界と死後の世界を行き来できる空間移動能力を持っているのよ」

「なんですかそれ……」

「言葉通りの意味よ？この子、いつからかこの特異な能力を持って生まれたの」

空間移動能力!? 漫画やアニメとかで聞く二つの世界を自在に行き来できる能力というとしてもないチート能力を艦娘が持っているというのか!? どういうことだってばよ……。

「ビスマルクお姉さま！ 言わないでくださいよ！」

「だって早めに言っておかないと……」

この子がただものではないことは死後の世界にいた頃から気づいてはいたけど、どうも驚きのほうが大きい。だってそんなこと聞かされたら誰だって驚くだろう。

「ごめんなさい……隠すつもりはなかったんだけど、どうしても言えなかった……」

「言えなかったって事は、何か嫌な思い出が？」

「ああ。この子ね、今までも幾度となく死後の世界に赴いて、先ほどの能力を明かした上、この世界を救う勇者になって欲しいってお願いしたらしいの。だけど皆それを聞いた瞬間、まるで彼女を疫病神扱いするかのように遠ざかったんだって。彼女それで心に深い傷を負ってしまったらしくて……」

「そんな事が……」

まあ、無理もないか。気づいたら死後の世界にいて、目の前に突然現れた挙句、空間

移動能力を持っていると明かした上に、自分たちの世界を救う勇者になって欲しいだなんてお願いされたら、普通は遠ざかるだろう。俺も信じられなかったが、この子は強引に俺の手を掴んでこの世界に連れて行つた。本当ならこの子を変人扱いして無理やり振り切つていただろうが、この子は俺が承諾する前に嬉しそうに俺をここに連れて行つた。それを見て、俺はこの子のお願いを受け入れようと決意したんだ。まあ、この世界で第二の人生を歩むつていう認識だけでも。

「でもこの人優しいんだよ！本来死ぬ予定だった老人を救つて身代わりになつたの！私、この人のその優しい心を感じたからこそここに連れて来たの！」

「お……俺は……何の取り柄もないただの……」

「取り柄？あるじゃない。その優しい所が、あなたの取り柄よ？もつと自信を持ちなさい？」

「優しい所……か」

優しい所だなんて、生まれて初めて言われた気がする。現実の俺は中学時代の親友が別の進路だったため、孤独な高校時代を送つていた。高校では中学までとは全く異なる環境で親友など出来ず、はじめはなかったものもはや地獄のような日々だった。その後大学受験で失敗し、卒業以降は引きこもりになった。ないない尽くしの俺だが、面と向かつてそんなことを言われると、周りに他の艦娘達がいるのも手伝つて羞恥を覚えて

しまう。

プリンツちゃんの謎が明らかになったところで、3階の左側通路の奥にある部屋前にたどり着いた……

「着いたわよ。ここがあなたの部屋」

「やっと着きましたか……」

ふう……いろいろと疲れたな……。ベッドで寝たい……。

「さarikさん！入りましょ！」

「えっ？君も入るの？」

「ダメ？」

「そういうわけじゃないけど……」

「ここ、私の部屋ですけど？」

……今何と言った？私の部屋？

「つまり……その、あなたとプリンツの共同部屋よ」

「……」

な……なんだって!?艦娘との共同部屋だと!?……思わず絶句してしまう。

「ごめんなさい。あいにく満室で、空いている部屋はないのよ」

「そうですか……」

てつきり一人部屋があると思っていたが、これは予想外だな。本当なら一人部屋じゃないことに文句を言いたいところだが、しようがないか。住まわせてもらうだけでもありがたいのだから、俺が文句を言う権利などない。

「改めて、これからよろしくね！リクさん……いや、リク君！」

「う……うん、よろしくプリンツちゃん」

大喜びのプリンツちゃんを見て思う。彼女俺のことが好きなんじゃないのか。まあそんなの勘違いに過ぎないのだが、前世で生きていた頃は艦娘と一緒に生活に憧れはしたが、いざ本当に一緒にすごすと思うとどうも実感が沸かなかった。

3話 YAGGY

プリンツちゃんと一緒にの部屋に過ぐす羽目になった俺は、ここまで来るのに疲れたため仮眠を取ろうとした。

「さあリク君！自己紹介に行きましょう！」

「え？俺疲れたんだけど……」

「ダメです！自己紹介は基本ですよ！」

「分かったよ！分かったから引張らないでくれ！」

今から仮眠をとろうと思ったのに……。プリンツちゃんにこれ以上振り回されないよう、今度から自発的に動くとするか……。というわけで、これから挨拶回りすることになった。

部屋を出た俺達は、まずビスマルクさんの部屋の隣の部屋前にやってきた。表札には陽炎、不知火、黒潮と書かれていた。

コンコン

「陽炎さん、不知火さん、黒潮さん、いますか？」

プリンツちゃんがドアをノックし、声をかけると、部屋の中から声が聞こえてきた。

「いるわ」

「いますよ」

「いるで」

「では、失礼します！」

プリンツちゃんが扉を開ける。すると中には三人の少女がいた。赤っぽい狐色のセミロングを黄色いリボンで結びポニーテールにした少女が陽炎、ピンクのセミロングを後ろでポニーテールに結んでいる少女が不知火、黒色のボブヘアで、左側のこめかみに金色の髪留めをつけた少女が黒潮だ。当たり前ながら彼女達の事は知っている。

「プリンツ？何か用？」

「今日からここで暮らす男の人を紹介しにきました！」

「男の人？」

陽炎は男の人という言葉聞いて首をかしげる。不知火と黒潮もお互いに見つめ合っつて疑問を抱いてるかのような表情をしていた。

「加藤リク君って言います！」

「加藤リクです。今日からここに暮らすことになりました」

3人に自己紹介する。ビスマルクさんの時は最初緊張してうまく言葉が出てこなかったのに、不思議と緊張はせずスラスラと言えた。彼女達が俺より年下に感じたからか？

「陽炎よ。よろしく」

「不知火です。よろしくお願いします」

「黒潮や。よろしゅうな」

3人は元気に俺に自己紹介してくれた。敬語だと堅苦しい気がするからここからはタメ口で話すとするか。

「ここに来たのはついさっき？」

「ああ、そうだ」

「じゃあもし分からないことがあったら、私達がいろいろ教えてあげるわ」

「気軽に言っていていいで」

「あなたに落ち度がないように、ご指導ご鞭撻して差し上げますのでご安心ください」

「お……おう」

3人は分からないことがあったら気軽に聞いて欲しいと言った。面倒見が良いんだな。プリンツちゃんがすべて教えてくれそうな気がするが、ともかくこれで挨拶は終えたな。

「それでは次に行きましょう」

「そうだな」

「あ、待って！」

部屋を後にしようとした俺達を止めたのは陽炎だった。何か言いたいことがあるみたい？

「この鎮守府は男性がいないから、あなたみたいな人は初めてなの」

「ビスマルクさんから聞いたよ？ここには男性が一人もないから、俺が珍しいって」

「まだ会って間もない人にこんなことを言うのはおこがましいと思うけど……私達とお友達になつてくれない……？」

なんだ、そんなことか。陽炎は頬を赤く染めながらお願いを要求してきた。その時、俺はひそかにガッツポーズする。前世で出来なかった女子の友達が出来たことが内心嬉しかったからだ。

「構わないよ。俺でよければ」

「本当？ありがとう！」

本来ならそんなこと言われても即座に断るだろうが、それは相手の気持ちがないがしろにすることとなら変わりない。きっと本心でお願いしたのだから、断る理由などない。陽炎のみならず、不知火と黒潮も同じ気持ちだろう。

「よかったですね！」

「うん」

「なあ、リクはん」

と黒潮が俺を疑惑のまなざしで見つめてくる。

「な……なんだ？」

「ここに来る前、ぼっちやったなあ？」

「フアツ!!」

思わず変な声が出てしまった……。

「凶星やな。うちの目は誤魔化せへんで？」

「なんで分かったんだよ!!」

「だって、陽炎姉が友達になって欲しいってお願いした時、ガッツポーズしてたから」

「確かにしました」

「見ていたのかよ!？」

しまった、見られていたのか……。

「そうだったんですね！」

「一番恥ずかしいところを突かれてしまったぞ……」

「まあ私はリク君と出会った時からそんな感じしてましたけどね！」

「嘘付け！絶対黒潮が言うまで気づかなかっただろ！」

「てへへ」

「リクはん照れすぎやー」

「君のせいなんだけど……」

なんでまだ出会ってから5分も経ってないのに他人の秘密を探るかな。それだけ気さくな証拠なんだろうけど。

「出来ればあまり詮索しないで欲しいな……。俺にとってのコンプレックスを探らないでくれよ……」

「なんでしよう？先ほどの黒潮の発言に何か落ち度でも？」

「大有りだよ！」

でもまあ、こうやってわいわいやるのは久しぶりかもしれないな。なんだか楽しいぜ。

「じーっ」

「今度はなんだ？人の顔をじっと見つめて……」

「リクはんって幼い顔つきやな」

「確かに」

「ですね」

再び俺を見つめたのかと思えば、次は幼い顔つきしているとかい始めた。またこの子は人のコンプレックスを……。

「あのさ、それ気にしてるんだからな？ そんなに楽しいかい？ 人の恥ずかしい所を指摘してや」

「「楽しい」」

息ぴったりすぎるだろ！ きつと戦闘でも抜群のコンビネーションを見せてくれるんだらうな……と論点がズレてしまった。

「あなた、なかなか面白い人ですね」

「そうか？」

「特にぼっちだった事を指摘された時の慌てぶりは見ていて楽しいです」

「別に人を楽しませるつもりでやってないし、そもそもそんなに慌ててないし……」

「なら今日の昼食の時間であなたがぼっちだった事を皆の前でバラしましょうか？」

「それはダメだ！」

「ほら、慌てました」

「「あはは」」

それだけは勘弁してくれ……。

「リク君、そろそろ行きますよ。お昼ごはんの時間までに全員への自己紹介を終えたい

ので」

「そ……そうだな」

「じゃあ昼食の時間になったらまた会いましょ」

「また後でな」

「では後ほど」

「ああ、俺がここに来る前ぼっちだった事は誰にも言わないでね？」

「私達3人だけの秘密にするわ」

プリンツちゃんも知ってるけどね……。

「じゃあね」

「「バイバイ」」

俺達は3人の部屋を後にすると、次の部屋に向かった。

4話 浜風と鹿島

陽炎、不知火、黒潮との自己紹介を終えた俺達は、今隣の部屋前へとやってきていた。

「ここは浜風さん、及び鹿島さんの部屋です！」

「浜風に鹿島ねえ……」

どこかで聞いたことのあるコンビだな……。

「では早速……」

コンコン

応答がない……。

「いないのかな？」

「しばらく待つてみようぜ」

「……反応がありませんね」

「仕方ない、次の部屋に向かおうか」

「はいー！」

次はどんな艦娘に会えるのか、期待と緊張を抱きつつ次の部屋に向かおうとしたその

時……。

「あはは」

階段の方から女子の笑い声らしきものが聞こえてきて、数秒と経たないうちに二人の銀髪の美少女が姿を現した。

「リク君！あの二人組みが浜風さんと鹿島さんです！」

「ああ、分かってる」

銀のボブヘアで金の髪留めをつけた美少女が浜風、隣のウエーブがかかったツイントールの美少女が鹿島だ。なぜ知っているのかは今更言うまでもないだろう。

ただ一つ言えることといえば、二人とも立派な胸部装甲を持っているということだ。

「ねえ、あそこにいるのプリンツじゃない？」

「それに、もう一人いるわ」

どうやら俺達に気づいたみたいだな。

「こっちですよ！浜風さん！鹿島さん！」

大はしやぎで手を振るプリンツちゃん。それに引き付けられるように二人がこちらに向かってくるが、やはり俺がいることが不思議そうだ。

「その人誰……？」

「この人じゃない、男の人みたいだけど……」

「この人は……」

「加藤リクと申します。今日からここで暮らすことになりました。よろしく」

「男性ね……まあいいわ、私は陽炎型13番艦の浜風です」

「香取型2番艦の鹿島です」

「よろしく願います」

これまではプリンツちゃんが俺の名を名乗って次に俺が名乗るパターンだったが、さすがに毎回彼女に名乗らせるわけにはいかないので、今回からは進んで自己紹介するこ
とにした。すると二人は俺に続いて自己紹介してくれた。

息びったりによりしく願いますと言ってくれた二人に、俺はあるお願いをする。

「これから生活をともにしていくんだから、出来れば敬語じゃなくタメ口で接してもらえると嬉しいな。俺もそうするからさ」

「分かったわりク」

要は気軽に接して欲しいということだ。何しろ敬語だとやりづらい上になんとか
距離を感じてしまう。

だからこういうお願いをしたわけだ。

「ねえリク君……」

「ん？」

ふと、鹿島が俺に声をかけてくる。

「私、敬語でいいですか？男性は初めてなので……」

「やっぱり、慣れないんだね」

「はい……」

鹿島が敬語で接していいかと問う。ここには男性は一人もおらず、初めて異性と接することになるんだから、無理もないな。いきなりタメ口で話せと言われても無茶振りが過ぎるし……。

その割には浜風はあっさりとは慣れているようだけど、鹿島がそうでない以上は仕方ないため、彼女の願いを受け入れた。

「徐々に慣れていくと良いよ。自分のペースでね」

「ありがとうございます」

「ふふ、優しいのねあなたって」

「そうか……?」

プリンツちゃんの謎を明かす場面でも言われたが、俺ってそんなに優しいのかな？嬉しくも恥ずかしい思いが交差していく。まあ、俺は自分の価値観を押し付けて相手の自由を束縛する奴が大嫌いだが。

「はい、優しいんです！」

「お……おう……」

「あ、そうだ」

浜風はそういうと自分の部屋に戻っていった。

15秒後、浜風が自室から出てきた。

「ごめん。突然部屋に戻っちゃって」

「構わないよ。ところで、何してたんだ？」

「これを渡しておこうと思って」

浜風はそう言って握り締めていたお守りを見せた後、俺に渡してくれた。

「お守り？」

「そうよ」

「これを俺にくれるのか？」

「ええ。それは私達と友達になった証だから」

「何気ないやりとりをしていただけなのに、もう親友として受け入れてくれるのか？」

「悪い？」

「悪くはないけど……ちよつとあつさりしすぎかなって」

「ここに来た以上は共に戦う仲間なんだから友達なの。分かった？」

「なるほど」

なんか短時間で5人も友達になつて……。こうもあっさり過ぎると何か裏があるのではないかと想像してしまうが、彼女がすっかりと友達の証となるお守りを渡してくれたのだからそれはないだろう。

「私達、これから暇だから、リク達の挨拶回りに同行しても良いかしら？」

「いいわね」

「その方が何かと楽しいし、構わないよ」

「問題ありません！」

「そうと決まれば、早速私達の隣の浦風達の隣りの部屋に行くわよ」

「「ああ（ええ）（はい！）」」

こうして浜風と鹿島と行動を共にすることになった俺達は、次の部屋へと向かうのだった。

5話 浦風と二人の秘密

「……か」

「そうよ、今からドアをノックするわね」

ノックは大事だな、これは常識だけど。

コンコン、ガチャ

「誰じゃ……って浜風に鹿島、そしてプリンツじゃないか」

「こんにちは！」

「こんにちは、浦風さん」

「……そこにおけるのは誰じゃ？」

「この人が今日からここで暮らすことになったから、挨拶回りしてるのよ」

両サイド団子状に纏められた青髪の美少女は浦風。セーラー服に水兵帽という出で立ちだ。セーラー服越しからでも分かる立派な胸部装甲を持っている。しかも袖を捲くっているためノースリーブ状態で、それによつてストラップとした綺麗な細腕と脇が目立っているためセクシーだ。

「俺の名前は加藤リク、今日からここで暮らすことになりました」

「見ない顔じゃが、もしや男か？」

見慣れた反応だな、今更驚くほどのものでもない。

「そうだが」

「なんじや、挨拶のときは敬語だったのに、突然タメ口になるんじやな」

だってその方が親しみが持てるし、敬語だと失礼な気がするし。

「まあいいけん。うちは浦風じゃ、よろしくな」

「（ちらちら）」

「ねえ、磯風と谷風はいるの？」

「ああ、あの二人なら今遠征に出向いていて不在じゃよ」

「そう……」

なんだ、しっかりと遠征には出向いているんだな。ここは外界から隔離された感じが

したからってつきり行われてないかと思っていた。

まあそれだとうやうやって資源の調達しているのか不明なんだが……。

「とうか、リクはどうやってここに来たのじゃ？」

「その事は出来れば秘密にしたいな。あまり気持ちのよいものじゃないし」

俺が前世で死んでこの世界で転生してやってきたなんて言っても混乱するだけだろ

う。

だからこれは秘密にしておくことにする。同じ鎮守府に住んでるんだからプリンツちゃんが生後の世界とここを行き来できることは知っているかもしれないが、それは彼女とビスマルクさんだけの秘密にしている可能性も否定できない。

とまあ偉そうに秘密にしたいと言っているが、プリンツちゃんには知られてるし、ビスマルクさんにも知られているのだが……。ああこの子が口を滑らせないか心配だ……。

「リクがそういうなら余計な詮索はせんよ」

「ありがとう」

「あ、あと、これはお願いじゃけん……」

「？」

「もし磯風に挨拶しに回ったとき、料理を振舞うなんて言い出したら絶対断るんじやぞ……？」

あつ……もう察しだな……。

「あいつの料理は一口食べただけで数時間失神するほどの想像を絶するまずさなのじゃ……」

「分かったよ、丁重に断っておくよ」

「物分りがよくて助かるけん」

物分りがいいも何も、艦これのゲームをやっていたから分かっていたことなんだから。
な。

「ねえ、浦風もリクの挨拶回りに同行しない？」

「すまん、午後から対空射撃の訓練じゃけえ、一緒には行けないけえね……」

「そう、なら仕方ないわね」

「では、そろそろ行きましようか」

「そうですね！」

「それじゃあ、昼食のときにまた会おうな」

「また後でな」

浦風達の部屋を後にした俺達。ここで俺はプリンツちゃんにあることを耳打ちする。

「ねえプリンツちゃん……」

「はい？なんでしようか？」

「さっきのやり取り見て分かっているとと思うけど、出来れば俺が前世で不慮の事故で死んでこの世界に転生した事は話さないでくれよ？」

「なんでですか？」

プリンツちゃんはきよとんとした顔で首をかしげながら俺を見つめる。そんな動作

したら浜風と鹿島に感づかれちゃうんだけど……。

「とにかく、この事は俺と君、そしてビスマルクさんだけの秘密にしておくんだ！分かったね!？」

「は……はい」

とにかく、しっかりと云ってはおいたものの、うっかり口を滑らせないか心配だな……。

「二人とも、何を話していたの？」

「ちよつとね……」

「なんでもありません」

「それにしてもプリンツが首をかしげていたけど？」

「まあ、俺とこの子の秘密だよ」

「……まあいいけど」

「余計な詮索はしません」

あともでビスマルクさんにも固く言っておこう……。

6話 島風と朝潮

廊下を進み、次の部屋へと向かう途中……。

ダツダツ

「「うわっ！」」

俺たちの隣を、女の子らしき影が走り抜けていった……。

「島風！またあなたは廊下を走って！走るなら外で走りなさい！」

突然背後から女の子の声が聞こえたので振り返ってみると、そこに一人の少女が立っていた。なにやら怒ってるっぽい？

「だって外で走るの飽きたんだもん」

と、俺たちの横を走り抜けていった少女が再び俺たちの横を走り抜き、先ほどの怒っていた少女に駆け寄った。

「ごめんなさいね、迷惑をかけたみたい……」

「大丈夫ですよ」

「でも、廊下を走るのは危険だからもうやめなさいよ」

「そうですよ、誰かにぶつかって怪我でもしたら大変です」

「ごめんなさい。ほら、あなたも謝って」

「ごめんなさい」

なんだ、ちゃんと謝ることできるじゃないか。俺がそう感心した直後、二人の少女が俺を不思議そうな目で見つめだす。

「あの、あなたは……？」

「あつ……」

そういうえば自己紹介してなかったな。さっきのやりとりのせいではあるけども。

「俺は加藤リクと申します。今日からここで暮らすことになりました」

「男性ですか……初めて見ました……」

「まあ、ここには男性がいないと聞くから、不思議に思うのは当然だね」

彼女は俺を見つめ、何か恐怖を感じているような表情をしていた。当然だよな、男性と接するどころか、見るのすら初めてなんだから……。

「初めての男性は怖いと思うけど、心配することはないよ」

「はい……」

「ちよつとちよつと！私を無視しないでよね！」

「あ、ごめんね」

別に忘れていたわけじゃないが、それで彼女が不快になったんなら謝らないと。ちな

みにこの子は島風、極めてあざとい容姿をしていて、早いのが自慢らしい。

そして、そんな彼女を咎めた黒髪ロングストレートの少女が朝潮だ。正統派主人公的な感じなんだけど、それゆえに他の個性的な艦娘に埋もれがちだ。

とりあえず、朝潮への挨拶は済ませたので、次は島風への挨拶を済ませよう。

「俺は加藤リク、今日からここで暮らすことになりました」

「私、島風だよ。よつろしくー」

「私、朝潮と……申します……」

島風は特に臆することなく挨拶してくれたが、朝潮はまだオドオドしている様子だ。

これは慣れるまでにはかなりの時間を有しそうだな……。

「ねえ朝潮、私には厳しいくせにリクと話すときははずいぶん態度が違うじゃん」

「しょうがないでしょ、男性とお話するのなんか初めてなんだから……」

うん、しょうがない。

「朝潮さん！リク君はとつても優しいんですよ！だから怖がる必要はありません！」

「ちよつと無神経な励まし方だな……」

「何を言うんですか！これくらい当然です！」

「まあ、何もしいよりはいいだろうけど……」

「そうですか……」

気のせいかもしれないが、先ほどのプリンツちゃん言葉によつて朝潮の俺に対する恐怖心が少し和らいだ気がする。俺の頼りない直感だけだな。

「話してみると結構親しみが持てるわよ」

「プリンツさんが言ったとおり、この人は優しいですよ」

浜風と鹿島も続く。

「自分のペースで慣れてくれれば構わないよ、焦る必要はない。無理せずゆっくりとね」

「あ……」

ん？どうしたのだろうか？

「ありがとうございます！」

元気よくお礼をしてくれた。

「まだ慣れるのには時間がかかると思いますが、よろしくお願いしますね！」

最初に俺たちと会っていた頃よりも穏やかな表情になったな。朝潮にはそれがお似合いだ。

「では、私たちはこれで失礼します！またお昼ご飯の時に会いましょう！」

「バイバイ」

そう言つて二人は去つていった。

「よかったですね！」

「ああ、慣れるのにはまだ時間がかかりそうって言ってたけど」

「あなたの優しさに気づいたのかもしれないわね」

「絶対そうですよ」

「当然ですね！なんたってリク君は老人を庇って……」

「ツ!？」

俺は咄嗟にプリンツちゃんの口をふさぐ。

「ど……どうしたのよ」

「なんでもない！なんでもないさ！」

「リク君……?」

「気にしないで！あはは……」

「ンンンツツツ！」

この子……うっかり口を滑らせたな……。とりあえず、二人にバレないように小声で

……。

「バカツ！きつく言っておいたのに！」

「ごめんなさい！思わず口が滑ってしまつて……」

「これからは気をつけるんだぞ!？」

「分かりました！」

「二人とも何かを隠してるわね……」

なんか物凄く不安だな……。二人が疑惑のまなざしで見つめてくるし……。

7話 心構え

「さあrik君。これで半分の人と挨拶が出来ました」

「なんか……長かった気がするな……」

正直、俺は疲労が溜まってきた。何せ3年くらい引きこもりの生活を送ってきたため、こうやって歩き回るのも久しぶりだったんだ。たかがそれだけのことで疲れるなんて、自分でも情けないって思う。

「まさかもう疲れたの?」

「何故分かった……」

「ちよつと顔色が悪かったからさ。あなたもうちよつと体力をつけたほうが良いんじゃないかしら?」

「男性にしては体力がないんですね」

「ごもつともだ。身体能力も低いし、それでいて低身長。この3人とほぼ同じくらいだ。」

「ここで生活していく以上、敵との戦いも普通に起こります。あなたはここで唯一の男性なためもしかするとあなたが皆の中心になるかもしれないですね」

「うむ……」

「そのためには少し歩き回っただけで疲労されていては困るのです」

鹿島の言葉が俺の心を突き刺す。この子男性に慣れてなくて俺に敬語で接していいかって言っていたのに、いざとなるとかなり手厳しくなるんだな……。やはり練習巡洋艦の名は伊達ではないということか……。

「今はまだ皆にいろいろと教えられている立場でいいんですけど、いずれは皆から頼られる事を肝に免じておいてくださいいね」

「分かったよ」

「先ほどリック君が朝潮さんに言った通り、焦らずにゆつくりと体力をつけていきましよう。私たちが全力であなたをサポートします」

「あ……ありがとう……」

彼女の決意が伺える。もう男性に慣れたってことでいいんじゃないかな？

「鹿島は練習巡洋艦の血が滾ってきたようね。びつくりさせてごめんさいいね」

「ああ……正直かなりびびった……」

ちようどいい機会だ。鈍った身体をこの鎮守府で鍛えていずればここの艦娘たちの見本になってやるぜ！

まあ、彼女たちのサポートは絶対必要だけどね。それでも敵と渡り合うために、ゆっ

くりと力をつける、それが俺の心構えだ。男としての……な。

「あ、もうこんな時間です！」

「ん？」

突然プリンツちゃんが大声を上げる。近くに時計らしき物は見当たらないんだが……。

「早く食堂に行きましょう！」

「プリンツちゃん、もしかして時間が分かるとか？」

「いや、感覚で察知してるのよ、この子感覚能力優れてるから」

プリンツちゃんすげえハイスペックだな……。

時空移動能力といい、感覚能力といい、深海棲艦も叶わないんじゃないかな……。

「お前か？ 今日ここにやってきたというリクという男は」

「あ、長門さん！ それに陸奥さんも！」

と、一人の女性の声が聞こえたため振り返ると、そこにあのビッグ7の長門さん、陸奥さんの二人が立っていた。

「僕がリクですが？」

「これから昼食の時間なんだが、食後に皆の前で自己紹介をしてくれないか？」

「ちよつと長門さん！ まずはリク君に自己紹介してくださいよ！」

「あ、悪い」

「もう、長門ったら」

長門さんはプリンツちゃんに言われるがまま俺に自己紹介した。どうも忘れていたらしい。

「コホン、私は長門。この鎮守府の司令官を務めている」

「私は陸奥よ。長門の秘書を務めているわ」

陸奥さんも続く。

「ビッグ7……すごい貫祿だ……」

それに、長門さんがこの鎮守府の司令を務めているということは、提督と同じ立ち位置かな。

「ほら、リク君も挨拶してください!」

「あっ」

と、俺まで自己紹介を忘れてた。この二人の貫祿に驚いていてすっかり忘れてたぞ。

「こんにちは、加藤リクと申します。今日からここで暮らす事になりました」

「お前のことはビスマルクから聞いてる、よろしくな」

「よろしくね」

「よろしくお願ひします」

俺の名前はビスマルクさんからあらかじめ聞いていたようだな。あの人はどうやら俺達と別れた後、長門さん達の所に行つて俺が来たことを報告していたみたいだな。

「昼食の時間が終わつたらお前を皆の前に連れて行くから、その時に皆に紹介する」
「分かりました」

「じゃあ、また後でね4人とも」

長門さん達は食堂に向かつていった。

「私達もいきましよう！」

「ああ（ええ）（はい）」

8話 食堂へ

「ここがこの鎮守府の食堂か……」

昼食の時間になり、鎮守府の食堂にやってきた。中は艦娘達で賑わいを見せており、彼女達の話声がそこかしこから聞こえてくる。

「あ、リクはん達」

と、特徴的な呼び方で黒潮が声を掛けてきた。

「こんにちは、黒潮」

「普通に黒潮って呼んでくれたらええ。うちの仲間やで」

「お、そうだな」

「プリンツはんはいいとして、浜風と鹿島はんも一緒なんやな」

「まあね」

「特にやることがなかったので、挨拶回りに同行していました」

「なるほどな」

納得する黒潮の持っているトレイの上は、ご飯と味噌汁、そしておかずと思われる肉じゃがが乗っていた。

「今日の献立は肉じゃがですね！」

「そうやで。うち大好きや、リクはんは好きか？」

「ああ」

肉じゃがは好きだが、最近食べてないな……。

「うちはあつちの席だから、リクはん達も早く来いや、陽炎姉と不知火も待つてるで」

「分かった」

「はい！」

俺達は黒潮と一旦別れ、料理を取りに向かった。

料理が置かれているテーブルへと向かった俺達は、そこで朝潮と再会する。

「あ、リクさん達」

「また会ったね」

「こんにちは！」

「はい、こんにちは」

プリンツちゃん元気がよく挨拶すると、朝潮もそれに続きにこやかに挨拶した。

「島風は一緒じゃないの？」

「島風は他の子と一緒に食べてますよ」

いつも行動を共にしてゐるわけではないな。

「あ、潮さん！」

「えっ……？」

と、プリンツちゃんが彼女の隣にいた少女に声を掛けた。

「朝潮さんと一緒にいたんですね！」

「そうだけど……」

ややオドオドしながら返答する。

「あの……その人は……」

「俺は……」

「この人は加藤リク君！今日からここで暮らすことになったんです！」

「おいおい、俺が名乗る前に言っちゃったよ……。彼女に毎言わせるのはあれだつたから自発的に挨拶しようとしていたのに……」

「私は潮と申します……綾波型10番艦です……」

潮はゲーム基準からすると怖がるはずなのだが、不思議とそれほど怖がつてる様子には見えなかった。多分、朝潮から俺のことは聞いていたのだろう。

「よろしくお願ひします……」

「ああ、よろしく」

「では、私達は失礼します」

「また今度……お会いしましょう……」

二人は料理を盛り付けると、そのまま2列目のテーブルの方に去って行った。

「じゃあ私達も盛り付けましょ」

「そうですね!」

俺達も料理を盛り付け、黒潮がいる席に向かった。

「ここのご飯を作ってくれるのって間宮さんだよね?」

「はい、そうですね」

「よく知ってるわねそんな事……」

「もしかして、かつて鎮守府にいた事がありますか?」

「いや……たまたま風の便りで聞いたことがあっただけさ」

とりあえず適当にはぐらかしてみるが、前世で艦これを読みこんだことがあるのだから知っていて当然だったりする。

まあ、これだけで俺がこの世界で転生してやってきた、元現実世界の住民である事はバレないと思うが、朝潮と島風と別れた直後にこの子がうっかり口を滑らせそうになつたからなー。

「でも間宮さんだけじゃないわよ」

「他に誰が？」

「妖精も一緒に作っているわ」

妖精とは艦これにおいて装備に乗っているちっこい奴らの事。よく分からなかったらとりあえずググれ。

「妖精さんは間宮さんのお手伝いの他にも、工場において明石さんのお手伝いも行っていきます！」

「入渠する際に、傷を治療するためのバケツをぶつ掛ける役目も担ってるのよ」
「随分と多忙だな……」

きっとそれでも仕事をきっちりこなしてるんだろうな。元引きこもりの俺とは大違いだ……。

「4人とも、こっちや」

話し込んでいるうち、黒潮の声が聞こえる。

「リクー」

陽炎の声も聞こえる。そして隣には不知火がいた。

「こちらです」

不知火に呼ばれ、俺は彼女の隣に、プリンツちゃんが俺の隣の席に座る。浜風と鹿島

は俺達の真正面の席に着いた。

「うちの隣には浦風が座るから少し待つで」

「うむ」

「すまん、待たせたな」

しばらくして、浦風がやってきた。

「別に構わへんでー」

実際待っている間、プリンツちゃん達の明るい話のおかげで退屈はしなかった。俺はそれを無言で見えていただけで一言も喋っていない。

まあ、ガールズトークを聞いて楽しんでいただけなんだが。なんつーか、割り込む気が起きなかった。

「じゃあ浦風も来たし、いただこっか」

「それでは皆、手を合わせて……」

俺達はプリンツちゃんの指示で一齐に手を合わせ……。

「「「「「いただきます！」「「「「「」

9 話 最後の自己紹介

「ごちそうさま」

食事を終えた俺は、ゴクツとコップに入れた水を飲み干す。

「リク、おかわりしないの？」

「もうお腹いっぱいだからな」

「あなたって少食なのね、もっと食べたほうが良いわよ？」

あー、いわれると思ったよ……。

「ま、いいけど」

「でも食事は体力づくりの基礎ですよ、今のあなたにはご飯を多く食べる事が最重要です。明日から取り組んでみましょう」

「おう……」

まるで指導者のような口ぶりだな……さすがぬいぬい。

「じゃあおかわりしてくるわね」

「私も行きます！」

「じゃあ、うちもぼちぼち行ってくるわ」

「食事は体力づくりの基礎、敵と渡り合うためには力をつけないとな！」
「不知火も行きませぬね」

浜風、プリンツちゃん、黒潮、浦風、不知火の5人は席を立ち料理に向かって行った。
俺と陽炎、鹿島はそれを見つめる。

「よく食うんだな、うらやましいぜ」

「浜風はともかく、黒潮も不知火も、浦風も影響されてるみたいなのよね」

「プリンツさんもよく動きますし、その分よく食べるんですよ」

「俺も影響されそうだな」

「リク」

そうこうしているうちに、食事を終えたらしい長門さんがやってきた。

「あ、長門さん」

「リク、一旦外に出てくれ」

「外？確か長門さんが俺を連れて行くんじゃないや……」

「それよりも一旦外に出て前の出入り口から入ってきたほうが雰囲気が出るんだ。食堂の外に陸奥が待っているから一旦出てくれ」

「なるほど、んじゃそういうことだから、俺は行くね」

「行ってらっしゃいー！」

俺は鹿島と陽炎に見送られ、陸奥さんが待つ外へ一旦出た。

食堂から外に出ると、その近くに陸奥さんがいた。

「来たわね」

「は……はい」

正直、俺は緊張している。ピスマルクさんと初めて会ったあの時よりもさらに緊張していた。

「皆の前に出て注目があなたに集まるんだから緊張するのは当然ね」

「まあ……そうですね」

「ゆっくり深呼吸してリラックスしなさい、それで大分和らぐはず」

「はい……」

俺は言われた通りに深呼吸してリラックスする。効果はてきめんだった。次第に緊張していた身体がほぐれていく。

これで準備は万端だ。

「準備はいい?」

「はい!」

陸奥さんに連れられて、俺は再び食堂の中入り皆の前に立った。

「はい皆さん！注目！」

入った直後、プリンツちゃんが皆の前に出た俺を見て空気を読んだのか、声を上げて皆が俺のほうを向いてくれるようにしてくれた。

「何何」

「新入りが来たっぽい」

「だけど艦娘ではないね」

「男の人よ？」

続々と艦娘達が俺の方を見る。それもかなり不思議そうな目で。

「うっ……一気に視線が俺に……」

「フアイト！」

緊張する俺を見て陸奥さんが応援してくれる。

「鎮守府の皆さん、こんにちは」

「おお……」

「俺は今日からこの鎮守府で皆さんと一緒に暮らすことになりました、加藤リクと申す物です」

陸奥さん、そして遠目からプリンツちゃんも応援してくれている影響か、特に詰まる

ことなく自己紹介が出来た。

「皆、いろいろ教えてあげてね」

「「「はーい」」」

艦娘達は全員元気よく返事をした

「よろしくお願ひします」

ゆつくりとお辞儀して締めくくり、プリンツちゃん達の下へ駆け込んだ。

「すっげえ緊張したぜ……」

「お疲れ様です！」

「なかなかかっこ良かった！」

陽炎がうれしそうに言う。

「は……はあ」

「では、片付けましょうか」

「そうですね！」

俺達は食器が乗ったトレイを返却口に持って行き、片付けた。

「さてと、部屋に戻って昼寝でもしようかな」

と思った矢先、他の艦娘達が俺の元に押し寄せ、質問攻めにあって昼寝の時間を2時

間ほど削られるハメになった……。

第2章 動き出す勢力編

10話 準備

前世において不慮の事故で死亡し、この世界に転生してから一日が経った。

俺はこの世界で生き抜くために、早朝からトレーニングを行っている。

今後深海棲艦はもちろん、昨日ビスマルクさんが言っていたそれ以外の邪悪な存在を相手しなければならぬのだから、これをやって力をつけるのは当然の事だ。

とはいえ、すっかり鈍ってしまったこの身体に、朝から1時間のトレーニングは少々堪えた。

リク「今日はこれくらいにしておこうかな……」

プリンツ「頑張りますねー」

水の入ったペットボトルを持って駆け寄ってきたプリンツちゃんがそれを俺に差し出す。彼女は俺が朝早起きしてトレーニングしているのをずっと付き添っている。別にプリンツちゃんまで早起きしてまで付き添わなくてもいいのに……。

リク「敵と渡り合うためにはまず力を付ける事から始めないとダメだからな」

プリンツ「そうですね、でもいくらそれで力を付けようとしても、ご飯をいっぱい食

べないという意味ないですよ？」

リク「うぐぐ……」

確かにそうだ……。

リク「だけどいきなり食事量増やせって言われてもなあ……」

プリンツ「それ、いきなり1時間の練習で身体を鍛えようとしているのも当てはまりますよね？」

核心つきやがった。この子抜け目ないな。

??「いたいた」

プリンツ「ビスマルク姉さまだ！」

と、プリンツちゃんか大はしやぎで駆け出す。その先にはビスマルクさんがいた。

リク「ビスマルクさん」

ビスマルク「こんなところにいたのね、もしかして自主練？」

リク「まあそんなところですね」

ビスマルク「朝ごはんの準備が出来たから、はやく食堂にきなさい」

そう言っつてビスマルクさんは抱きついていているプリンツちゃんを引き剥がし、去つて行つた。

リク「じゃあ行くか」

プリンツ「はい！」

昨日不知火が言ったとおり、俺は今日のこの朝食から量を増やす事を試みるが、やはり元々少食の俺がいきなり量を増やすのは無理があつた。それでもなんとか完食する。

リク「なんとか食べられた……」

不知火「しようがないですね、それでは今後が思いやられます」

リク「なんだよそれ……」

浦風「お前は一体何の指導をしておるのじゃ……？」

プリンツ・浜風・鹿島・陽炎・黒潮「あはは」

そんなこんなで和気藹々とした朝食を済ませた俺は、明石さんがいるという工廠に向かった。自己紹介をまだ済ませてなかったのと、敵と戦う上でかかせない艀装を作つてもらうためだ。

当たり前というべきか、プリンツちゃんと共に。

リク・プリンツ「失礼します！」

??「あら、いらつしやいませ」

元氣よく明石さんが出迎えてくれる。

プリンツ「こんにちは！明石さん！」

明石「プリンツさん、それに……」

リク「そういえば、まだ自己紹介を済ませてなかったですね。俺は加藤リクと申します」

明石「私は明石、見れば分かると思うけど工場で艤装の製作及び整備を行っています。工廠では、明石さんのほかにたくさんの妖精がせつせと動き回っていた。

明石「今日はこういったご用件で？」

リク「艤装の製作をお願いできませんか？」

明石「構いませんよ、戦闘を行う上で必須ですからね」

リク・プリンツ「ありがとうございます！」

なんでプリンツちゃんまでお礼を言うんだよ。

明石「見ての通り、作業はたくさんの妖精さんのおかげではかどってますから、1日時間をいただければすぐに完成しますよ！」

リク「分かりました」

妖精さん達、ちっこい身体でよく動いてるよな。まるで働き蟻みたいだ。これだけいれば艤装を作るのなんてあつという間だろうな。

一体どこからやってきたのだろうか？ 装備が完成した際に生まれてきたとか？ いや、

んなわけないか。

リク「それでは、また明日お伺いします」

プリンツ「バイバーイ！」

明石「はーい」

工廠を後にした俺達は自分達の部屋に戻ってきた。朝からかなり動いたため、休息もかねてベッドに腰掛ける。

プリンツ「リク君」

リク「なんだ？」

プリンツ「今日の昼食後、演習が行われます」

リク「演習ねえ……」

演習とは、まあ端的に言えば艦娘同士の模擬戦だ。

プリンツ「はい、それを見学しませんか？」

リク「見学か」

プリンツ「身体を鍛えるのはもちろん大切ですけど、実際に戦いの様子を見学して知識を養うのも大事ですよ」

なるほど、それは名案だな。

プリンツ「そしてそれを元に、明日も行われる演習に参加して実戦を経験しましょう！」

リク「演習って参加制なのか？」

プリンツ「はい。鎮守府の出入り口のポストに演習参加申込書というプリントがあるので、それに必要事項を記入し、演習の記録を付けている大淀さんに提出するだけです」

リク「理解した」

プリンツ「それでは、早速プリントを持ってきますね！」

リク「君一人で行くの？」

プリンツ「朝からトレーニング頑張ってたから、リク君は休んでいて良いですよ！」
それじゃあお言葉に甘えさせてもらうかな。正直足が棒になってもう歩けやしない。昼食までの数時間休息させてもらおう。

長門「リク……」

陸奥「突然リク君の名を挙げてどうしたの？」

司令室では、長門がふとリクの名を呼んでいた。

長門「あいつと出会った時から、私は感じている」

陸奥「何を？」

長門「あいつの身体の底に眠る潜在能力をだ」

陸奥「どういうことよ」

長門「初めての出撃で、深海棲艦共と渡り合える気がするんだ」

長門のその一言はまるでリクの秘めたる力を察しているような口ぶりだった。

陸奥「言っている意味がさっぱり分からないわ」

長門「要は、あいつは家にとって優秀な戦力となるってことだ。直感だがな」

陸奥「……」

まだ入ってきて1日しか経ってないにも関わらず、リクが鎮守府にとって優秀な戦力になるといふ言葉を陸奥は理解できなかつた。

陸奥「ねえ長門」

長門「なんだ？」

陸奥「あいつと出会った時から私は感じてるっていう台詞、キモいわよ？」

長門「気にするな」

……と冷静に返す長門だった。

?? 1 「アノ鎮守府ニ、別世界カラ人間ガヤツテ来タヨウダナ」

?? 2 「珍シイ事モアルモノダナ、艦娘デハナイタダノ人間トハ。アノ艦娘ガ連レテ来

タノカ？」

黒雲に覆われ、光が一切射さない海域にある泊地らしき場所に、美しい女性の姿をした生命体が2体ほどいた。それは言わずもがな、深海棲艦である。

どうやら彼女達も、艦娘と同じく拠点なるものを持つているようだった。

深海棲艦1「ドウスル？アノ男ガ我ラノ脅威トナル前ニ芽ヲ摘ンテオクカ？」

深海棲艦2「イヤ、ヒトマズ様子見ダ。今動イテモ、例ノ敵ニ感ツカレル恐レガアル」

深海棲艦1「海異鬼……カ」

11話 演習そして庭園

昼食後、陽炎達と時間を潰していた俺達は、演習が行われる場所に向かっていた。どこにあるのかとプリンツちゃんに聞くと、鎮守府の裏側にプールがあるらしく、そこが演習場となっているらしい。さらにその目と鼻の先に対空射撃の訓練が行われる広場があるとのこと。

リク「ここか……」

こうしてプールにやってきた俺は、そのあまりの広さに開いた口が塞がない。

陽炎「すごいでしょ？」

リク「確かにすごいけど、これって元々行楽の場なんじゃないのか？」

黒潮「よう知つとるな、そうやで」

プリンツ「演習の場として使えるのはここしかないですからね、それに対空射撃の場と面しているこのほうが何かと合理的なんですよ」

リク「なるほど」

浜風「あ、始まるみたいよ」

と浜風が言うのと、演習場に8人ほどの艦娘が入ってくる。

ちなみに自己紹介は昨日の時点で全員に済ませてある。

リク「プリンツちゃん。参加者は誰なのかな？」

プリンツ「えつと……」

プリンツが説明を始める。

プリンツ「まず第一艦隊が夕立さん、時雨さん、蒼龍さん、飛龍さんで、対する第二艦隊は秋月さん、照月さん、赤城さん、加賀さんですね」

リク「そうそうたる顔ぶれだな……」

それぞれ白露型、蒼龍型、秋月型、赤城型とは……。相性的に見るなら、秋月型が入っている第二艦隊のほうが有利だろうな。

何せ、秋月型は防空型駆逐艦だから、空母が入っている編成は不利になりがちだ。バンバン艦載機が落とされるのが目に見てくる。

そして、最後に演習の記録をつけているという大淀さんが入ってきて準備が完了したようだ。

大淀「ええ、参加組みの皆さん。今回の演習は先ほど申し上げたとおり、前日この鎮守府にやってきた加藤リクさんに戦いとはどういうものなのかを見せるための意味もこめています。決して手を抜かないでくださいね」

参加組み「はい！」

大淀「それでは、始め！」

大淀の掛け声とともに、演習が始まった。

艦娘たちは俺にいいところを見せようと張り切っている様子で、秋月と照月が蒼龍さんと飛龍さんの飛ばした艦載機を全滅させ、夕立と時雨が二人の背後に軽快な身のこなしで回りこみ、そのまま攻撃を命中させてものの見事に大破させた。

そして直進してきた赤城さんと加賀さんが仕返しと言わんばかりに二人を大破させ、残ったのはそれぞれ空母勢になった。

不知火「これはもう勝負は見えましたね」

浦風「第一艦隊の二人は艦載機が全て落とされたことで棒立ちになってしまったからねえ」

秋月型の二人の対空射撃によって艦載機が全滅し何も出来ず棒立ち状態の蒼龍さんと飛龍さんは、赤城さんと加賀さんの飛ばした艦載機によって大破させられ勝負がついた。

結果は第二艦隊が勝利。完封とは言えないものの、それでも二人を残して勝利したのは大きいだろう。

大淀「そこまで！」

参加組み「お疲れ様でした！」

と参加組みが敬礼する。大破してゐるつてのに元氣いいな……。

秋月「参考になりましたか？」

そこに秋月が俺に近寄り問う。

リク「ま……まあ参考になつたよ……」

正直あんまり参考にはならなかつた。理由はあまりにも一方的に見えたから。でもまあ、あんな感じで戦っているんだなど自分の頭の中で整理できてはいたが。

照月「すごいでしょ？ 私たち秋月型の力！」

リク「まあ……うん」

それ以前に目のやり場に困るんだよな……。早く入渠してきてくれ……。そんな服が破けて腕で大事なところを隠してるポーズをしながら俺に近寄らないで欲しい……。

大淀「そんなこといいから早く入渠していらつしやい！」

秋月・照月「はい」

大淀さんに言われ、二人はお風呂へと駆け込んだ。

浜風「リク？ 顔が赤いわよ？」

リク「なんでもない……」

そりやあんな破けた服であのスケベボディが露出しているのを見て顔が赤くならん奴はいないだろ……。それとも俺が異常すぎるのか？

大淀「あれを見て少しは戦い方というのが分かったと思います」
リク「あ、はい」

そんなことを考えているうちに大淀さんがやってきたため、とりあえずは平常運転へと戻ること。

大淀「それでは、明日の演習に参加しましょう。そして実際に艦装を背負って実戦を経験しましょうね」

リク「分かりました。この度はどうもありがとうございます」

おそらく忙しい時間を割いてまで俺に戦いの様子を見学させる機会を設けたのだから、そのため俺は頭を下げお礼を言った。

大淀「どういたしまして」

そう言つて大淀さんは律儀にお辞儀し去っていった。

リク「さてと、演習に参加していた皆の入渠が終わつたらお礼を言いに行くとしよう」
プリンツ「そうですね！」

俺はプリンツちゃん、陽炎、不知火、黒潮、浜風、浦風、鹿島と共に鎮守府を出て右折した先にある庭園に行き、それまで時間を潰すことにした。

庭園の門を開けると、真っ先に十字状の石造りの通路が目に入る。その通路の周囲

4ヶ所には噴水があり、水しぶきによつて虹が薄つすらと出て幻想的な雰囲気醸し出してくれる。

通路をまっすぐ進むと澄んだ広大な湖が姿を現し、それを取り囲むように砂利道が広がっている。湖には鯉が優雅に泳いでおり、周囲にある花畑には色とりどりの花が咲いていてとても綺麗だ。

ちなみに通路を左に曲がると神社、右に曲がると穏やかな波の音でこちらを癒してくれる砂浜があるなど、人を飽きさせない施設が充実している。

リク「昨日も来たけど、いつみても感動するわ」

プリンツ「皆さんに充実した日常を提供しようと、職人妖精さんが頑張ったんです！」
俺は昨日仮眠する時間を削つて、ここに来た。この世界に来てから忙しく動き回っていた影響で疲れていたため正直行きたくはなかったが、それでもプリンツちゃんはどうしても見せたいものがあるって言うんで渋々来てみた。

するとその景色を見た瞬間びっくりよ。仮眠する気力が一気に失せたんだ。

つまりそれほど感動したってわけだ。

プリンツ「さ、見て回りましょう！」

リク「そうだな……って引つ張るな！」

昨日は全てを見て回ったわけではなかったため、プリンツちゃんは今日こそは全部見

せてあげるといわんばかりに俺の手を引つ張る。このシチュエーション、この世界に連れてくる時もあつたな。陽炎達が苦笑いしながら後を着いて来る。

プリンツ「ここは私たちの心を癒してくれる、そんな場所です！」

リク「それは分かったから腕を引つ張らないで欲しいな」

陽炎「プリンツつたらリクを癒したくてたまらないみたいねえ」

黒潮「微笑ましい光景やなあ」

不知火「ある意味リクさんにとってはあれが癒しかもしませんね」

浜風「それ以前にプリンツの扱いに困ると思うけど……」

鹿島「あはは……」

俺的には自発的に動きたいんだけど、彼女はそれを先読みしたかのように俺の腕を引つ張るんだよなあ。悪い気はしないんだけど、過保護すぎるのもちよつとねえ……。

そんな俺も、彼女のことは放っておけないから連れられるがままに行動してるんだけども。いずれは彼女を守るナイトになるのかなあ……つと変な想像しちまった。

その後花畑、砂浜、神社と回り、至福の時を満喫した後は、鎮守府に戻って演習にて実際に戦いの様子を見せてくれた参加者にお礼を言って回り、部屋に戻ってきた。

とりあえず夕食までは時間があるので、一度仮眠を取ることにした。

そういえば、前にビスマルクさんが言っていた深海棲艦以外の邪悪な存在って何者なのだろうか？それが気になりになる前に眠りについていた。

12話 第三勢力の正体そして模擬戦

リク「ふう、食った食った」

プリンツ「今夜の献立の親子丼は絶品でしたね！」

浜風「間宮さんと妖精さんの作る料理はどれも最高よね」

黒潮「そうやなあ」

夕食を終え一息ついた俺達は、いつもどおり返却口に食器の乗ったトレイを置く。この鎮守府の料理は本当に絶品で、少食である俺もこれならいくらでもおかわりしたいと思う。

リク「さてと、お腹も膨れたし、お風呂に入って寝るとするか」

プリンツ「明日には艦装も完成して演習に励むことが出来ますね！」

リク「朝のトレーニングもあるしな」

鹿島「あら、朝早起きしているんですか？」

リク「まあな、午前6時に起きて7時までの1時間ほど」

不知火「意外ですね」

リク「意外ってなんだよ」

俺に対する不知火の第一印象って怠惰ってイメージだったのか……。まあそのとおりなんけども。

陽炎「不知火、そういう人の神経を逆撫でする発言はよくないわ」

黒潮「リクはんだって頑張ってるんやからな」

フオロー感謝するよ。

不知火「ただ少しからかっただけです」

浜風「性質悪いわよ……」

全く持つてそのとおりである。

リク「風呂、入ろうぜ……」

プリンツ「はい！」

ちなみに関係ない話になるけど、ここって今まで男性が一人もいなかった影響か男子風呂はない。

つまり、俺がどうやって入浴しているのか……それはまた別のお話ということにしておく。

リク「風呂から上がった後のコーヒー牛乳は最高だぜ」

プリンツ「フルーツ牛乳もおいしいですよ！」

お風呂上りの飲み物はどれも最高だけど、中でもコーヒー牛乳はうまい。

ちなみに陽炎、黒潮、浦風は俺と同じで、不知火、浜風は普通の牛乳、鹿島はプリン
ツちゃんと同じのを飲んでいる。

風呂でさっぱりした後はこうでなくちやな。

??「あら、リク君にプリンツじゃない」

とその時、ビスマルクさんがやってきた。

プリンツ「ビスマルクお姉さま！」

リク「これから入浴ですか？」

ビスマルク「そうよ」

陽炎・黒潮・不知火・浦風・浜風・鹿島「こんばんわ」

と陽炎達があいさつする。

ビスマルク「あなた達、最近いつも二人といるわね」

陽炎「友達ですからね」

黒潮「一緒にいると楽しいんや」

ビスマルク「そう」

ちようどいい、この際だから聞いておくか。

リク「あの、すみません」

ビスマルク「どうしたの？」

リク「ビスマルクさんに聞いておきたいことがあるんですよ」

ビスマルク「何でも聞いて良いわよ」

この人の言っていた深海棲艦以外の邪悪な存在の正体が気になるのだ。最初は敵襲が多いっただけでびっくりしていたため流していたが、今日になってそれが俺の中でつつかえ始めていた。

リク「昨日言っていましたよね？深海棲艦以外の邪悪な存在の事」

ビスマルク「その事ね……」

リク「それについて教えてください」

ビスマルク「……」

そう俺に問いただされると、ビスマルクさんは一呼吸おき……。

ビスマルク「あなたに余計な負荷をかけない様に黙っているつもりだったけど、その眼差しで見つめられた上で問われたら隠す気なんてなくなるわ」

リク「俺はここに来た以上は覚悟は出来ていました。この世界を守るため、そしてプリンツちゃんや皆を守りぬくためならどんな過酷な運命も受け入れる覚悟です」

プリンツ「リク君……」

ビスマルク「なら問題ないわね」

そして彼女はその存在の名を口にした。

ビスマルク「海異鬼、それが深海棲艦以外の邪悪な存在の正体よ」

リク「海異鬼？」

ビスマルク「彼らは死んだ海洋生物の怨念が実体化したものよ」

リク「怨念が実体化？」

ビスマルク「深海棲艦によつて海が侵食され、その影響で死んでしまった海洋生物の彼女達に対する恨みが、海異鬼という存在を生み出したの。彼女達に限らず、私達艦娘に対しても自分達が死んだ原因を作った元凶と見ているみたい」

双方を敵と認識している、第三勢力かな？

それにしても可哀想だな……。

リク「どうにかして怨念から解き放ちたいですね」

ビスマルク「どうしてそう思うのかしら？」

リク「だってあまりにも可哀想じゃないですか。平和に暮らしていたのに、突然故郷の海を侵食されて命を落としたわけですからね」

ビスマルク「確かにそうね、だけど彼らは私達のみならず罪もない人々の命を奪い、人類の平和を脅かしているのよ。無実とは言えないでしょう？」

なるほどな、例えば悲しい出生だったとしても、自らの意思で罪もない人々を襲いその

命を奪う奴らには一切同情できないってことか。それもそうだな。

リク「まあ、その通りですよね……」

ビスマルク「そういうこと、だから奴らは倒さないとイケないの。深海棲艦と共にね」

リク「じゃあ前言撤回させていただきますね」

ビスマルク「ええ」

さてと、そいつらの強さを知っておこう。

リク「どれほどの脅威なんですかね？」

ビスマルク「彼らは負の感情が強すぎるためか一体一体の力は強力よ」

リク「……」

ビスマルク「それに普通に殺すだけにとどまらず、喰らうこともあるのよ」

食い殺すとか……。ちなみに俺は食べても全然おいしくないぞ？

奴らに出くわしたらあらかじめ伝えておこう……通じないだろうけど。

ビスマルク「とりあえず、基本的な情報はこのくらいね」

リク「ありがとうございます」

ビスマルク「お互い、頑張りましょうね」

そう言つてビスマルクさんは去っていった。

リク「それじゃあ行こうぜ」

プリンツ「はい！」

その後、浜風達と別れた俺達は部屋に戻ってきた。

プリンツ「おやすみなさい」

リク「おやすみ……」

そしてベッドに横になるなり眠りについた。

翌朝、昨日依頼していた艀装が完成したのを大淀さんから聞き、工廠へとやってきた。

明石「これがあなたの艀装です！」

リク「おお！」

では早速、完成した艀装を装備してみる。

腰回りにマウントする形だ。

リク「艀装って重いイメージがあったけど、案外軽いものですね」

明石「戦闘の際不自由がないよう、個人に合わせた大きさにしているのでそこらへんは大丈夫ですよ」

リク「なるほど」

プリンツ「似合ってますよ！」

リク「ありがとう」

明石「では今日の演習、頑張ってくださいね」

リク「はい！この度はありがとうございます！」

プリンツ「それではまた！」

忙しい合間を縫って艀装を作ってくれた明石さんや妖精さん達にお礼をし、工廠を後にした。

そんなこんなで演習の時間がやってきた。

俺が水上に位置取り、観客席にはいつものメンバーが座っている。そして目の前にはなぜかプリンツちゃんがいた……。

リク「さてと、演習の時間になったのはいいが……」

プリンツ「どうしましたか？」

リク「なんで君まで艀装を装着しているの？」

プリンツ「あ、それはですね……」

リク「えっ……？」

まさかとは思いますが、俺の対戦相手って……。

プリンツ「私と戦ってもらいます！」

リク「ええ!!？」

まさにビツクリ仰天、彼女が俺の対戦相手なのか!?! そんな話聞いてないぞ!?

プリンツ 「ごめんなさい、伝えるの忘れてました」

そう言い放った後テヘツと舌を出す。いやいやそんな必要事項忘れちゃダメだろ。

リク 「それ以前に1対1なんだな……」

プリンツ 「そりやありク君が戦いというものを初めて体験するのですから、何もいきなり連係プレーを見せてなんて無理難題は押し付けませんよ」

リク 「う……うむ」

あくまで実際に戦って基礎を覚えろということなのだろう。

?? 「来ましたね」

と大淀さんが昨日と同じように入ってくる。

大淀 「始めましょうか」

リク・プリンツ 「はい!」

大淀 「プリンツさんは分かっていると思いますが、手加減はしてくださいね。それと時空移動能力は封印するように」

プリンツ 「はい!」

そりや、あんなチート能力を使われたら圧倒的に俺が不利だからな。

それと彼女、あの能力を持つ以外は普通の重巡と同じみたいだな、当然だろうけど。

プリンツ「まあ二つの世界を行き来出来る以外に使い道ないんですけどね」

どうやら、死後の世界とこちらの世界を行き来可能な以外は特に特別な力は持たないっぽいな。まあ、今はそんなことどうでもいい。

大淀「それでは、始め！」

プリンツ「リク君！手加減は不要ですよ！思いつきりぶつ放してきてください！」

リク「お……おう」

演習とはいえ、彼女を傷つけるのは気が引けるな。だが、そんな甘えは許されないか。ただでさえ演習というのは模擬戦なわけだし、そこで躊躇などしていたらいつまでたつても成長しないからな。

俺は決めたのだ、この世界で引きこもりの生活を送っていたあの怠惰な頃の自分を変えると。

プリンツ「さあ、いつでもいいですよ！」

このローラースケートみたいな感覚で移動するのはちときついが、それでも直進してプリンツちゃんに接近する。

リク「発射！」

プリンツ「甘いですよ！」

彼女に接近するなり右側の主砲から砲撃を放つが、彼女はまるで見切ったと言わんば

かりに自身も攻撃に転ずる。

すると双方の攻撃が相殺され、その衝撃で発生した黒煙によつて彼女の姿が隠れてしまった。

リク「まだまだだ！」

水上の移動感覚に苦戦しながらも左折し、彼女の姿が見えたところに砲撃を放つ。

プリンツ「中々やりますね！初めてにしては上出来です！」

リク「このくらいまだまだだ！」

プリンツ「私も負けませんよ！」

しかし楽々と避けられ、俺の背後に回り込むや否や砲撃を放つた。

リク「速いな！」

俺も彼女の真似をして回避を試みるが、やはりこの移動感覚に苦戦して避けきれず被弾してしまう。

リク「やっぱ強いな……」

プリンツ「こう見えても重巡ですから！」

さすが、戦闘慣れしているだけの事はある。

普段の生活だと天真爛漫且つ時折見せる天然さで子供っぽさを感じるプリンツちゃんだが、彼女は腐つても重巡、高い戦闘能力をもつドイツ艦なんだな。

陽炎「リク、移動にかなり苦戦してるようね」

浦風「そのせいでプリンツの攻撃を避けきれなかったけんねえ……」

不知火「その練習もあらかじめしておいたほうがよかったですんじやないですか？」
と俺達の試合を観戦している不知火が言う。

大淀「それについてはリクさんにその時間を設けなかった私の責任です」

浜風「確かに、敵との戦いは大抵海上で行われるから、その移動の練習の時間をあらかじめ設けておけばよかったわね」

鹿島「確かに……」

黒潮「せやな」

そんなやりとりが観客席で行われていた。

プリンツ「なんか陽炎さん達の話し声が聞こえてきましたが、海上における移動の練習をしておいたほうがよかったですかね……？」

リク「それは俺が自主的にやらなかったから悪い、今はそんなこと考えていても仕方ないだろ？」

プリンツ「それもそうですね」

リク「続きやるぞ！」

プリンツ「はい！」

これはあくまで模擬戦、別に死ぬわけじゃないんだからそんなの別の時間にやればいい。だから今は演習に専念すべきだ。

それは俺が暇な時間でやっていけば済んでいた話なので、今更考えていても仕方がないし、後を見据えて行動するという選択肢が欠落していた俺自身の自業自得だ。

プリンツ「それでは、行きます！」

彼女はそう言うと、装備していた水上偵察機を飛ばし、俺に狙いを定めてきた。これはおそらく弾着観測射撃、極めて強力な一撃だ。

あんなものまともに食らったら一発で大破だな。とても耐え切れる気がしない。

プリンツ「よく狙って……」

リク「よし……」

ここは避けるよりもありったけの全力をぶつけて少しでも威力を軽減させる。全ては防げないだろうが、それでもロクに移動にも慣れていないのに避けようとするよりはマシだろう。

俺は勝負に出た。

プリンツ「攻撃開始！」

リク「全主砲……発射！」

プリンツちゃんの弾着観測射撃と俺の全力の砲撃が放たれ、双方の攻撃がぶつかり合って威力が軽減されたものの、それでも十分な威力の弾着が直撃し、俺の全力の砲撃も彼女に直撃した結果、両者共倒れで演習は終わった。

後に彼女は大淀さんから「ちゃんと手加減してと言いましたよね？」と叱られたが、本人曰く「あれでも手加減はしました！」との事。うん、どう考えても全力だった。

まあ、ちゃんと謝罪してくれましたしっかり反省はしたみたいなので許してあげよう。というか、戦いの素人である俺が相手であつても全力で迎え撃ってくれた彼女に感謝したいくらいだ。

また俺達は気づかなかつたが、彼女との演習の様子はほぼ全員の艦娘が観戦していたらしく、入渠を終えた後に長門さんから知らされた。

13話 初めての出撃

演習での経験から、海上での移動に慣れなければ話にならない事が分かったため、翌日不知火の指導の下、プールで移動の練習をすることにした。彼女、指導出来る事が分かった瞬間妙に張り切りだしちゃって、厳しく教え込まれた。

不知火「上出来です」

リク「大分慣れてきたな」

不知火「では、今日はここまでにしましょう」

リク「おう」

30分ほどで移動にも慣れてきたため、ここで一先ず練習を終えることにした。

このあと陸に上がり、あそこで俺達の練習の様子を見ていたいつものメンバーの下へと向かう。不知火によれば海上での移動はいかにバランスを取れるのが課題らしく、慣れるまでにはそれほど時間はかからなかった。

その後朝食を終えてしばらく経った後、今から読み上げる部隊に所属する艦娘は10時30分にグラウンドに集合して欲しいというアナウンスが入った。どうやら、この鎮守府から少し離れた各3ヶ所に敵の生体反応があったらしい。

その呼ばれた一つの部隊にプリンツちゃん、陽炎型トリオも所属しているらしく、さらに3つの部隊の後、俺の名前も読み上げられたため、彼女達と一緒にそこに向かうこととなった。

グラウンドには、呼ばれた部隊に所属すると思われる艦娘達が集まっていた。

リク「これで全員なのか？」

プリンツ「みたいですすね、皆読み上げられた部隊に所属する人たちですよ」

リク「うーむ……」

辺りを見回してみるも、浜風、鹿島、浦風の姿はなかった。

リク「あの3人がいないな……」

陽炎「3人はさつき呼ばれたのとは別の部隊に所属しているからね」

リク「理解」

それじゃあ共に戦うことは出来ないな、残念だ。

その他には、一昨日演習にて大活躍を見せた時雨や夕立、秋月や照月の姿も見え、空母勢の4人の姿も目に映った。

後の艦娘も確認しようとするが、その前に長門さんと陸奥さんがやってきたため一先ずは一瞥をやめる。

長門「ええ、今回皆に集まってもらったのは先ほども読み上げたとおり、この鎮守府から少し離れた各3ヶ所に敵の生体反応があった。諸君にはその迎撃に向かつて欲しい。迎撃担当は一番強力な反応があつた東に赤城率いる空母機動部隊、弱い反応の西に夕立率いる水雷戦隊、そして南にプリンツ率いる水上打撃部隊がそれぞれ向かつてくれ」

一同「はい！」

陸奥「それと、リク君は南を担当する部隊と同行してね」

と陸奥さんが俺に指示を出す。

陸奥「そつちは他の部隊よりも数が少ないから、補強として向かわせるわ」

リク「分かりました」

聞けば、プリンツちゃんの率いる部隊は一枠の空白があり誰も入る予定がなかったとのこと。おそらく、プリンツちゃんが俺をここに連れてきたことを受けて、一番彼女と信頼関係が持てる俺を入れるつもりだったのだろう。

長門「それでは、ご武運を祈る」

そう言い終えると二人は去っていった。

プリンツ「それでは行きましょう！」

リク「待って、今この場にいるのは5人だけど、もう一人は誰が所属しているの？」

ビスマルク「私よ」

リク「ビスマルクさん!」

この人も所属していたのか……。

リク「ま、まあ予想は出来ていましたけど」

もちろん、嘘である。

ビスマルク「まあ、プリンツの義理の姉だしね、この子一人だと心配だし」

リク「なるほど……」

不知火「絶対分かってませんでしたよね?」

リク「言うな!」

ビスマルク「別に分からなかったから何か変わるわけでもないわよ」

リク「ですよね」

プリンツ「雑談はいいから早く行きますよ!」

5人「あ、はい」

プリンツちゃんがやる気に満ち溢れている……。俺もこれが初めての出撃で敵と相見えるので、彼女に負けられないようにやる気全開で行くぞ!

この後、出発地点である湾岸へと足を運び、海面に立ち出撃準備が整った。

ビスマルク「さあ皆、私が旗艦を務めるからしっかりと着いていらつしやい」
リク「他の部隊はもう出発したのかな？」

プリンツ「はい、後は私達だけです」

ビスマルク「それでは抜錨、出撃よ！」

プリンツ「あの、それ本来は私の台詞なんですけど……」

ビスマルク「ちよつとやって見たかっただけ」

この人、意外とお茶目なんだな……。

ビスマルク「大丈夫、あの台詞は今回限りだから」

プリンツ「絶対ですよ？」

ビスマルク「分かっているわよ」

プリンツ「それでは、プリンツ部隊！出撃します！」

リク「何その名前……」

そう心の中で突っ込んだ。

さて、生体反応は80mほど離れた場所に確認されたらしく、そこに向かうことに。

ビスマルク「おそろくここね」

リク「やべ……うまく出来るか不安になってきた……」

出撃前は自信满满だったにも関わらず、ここに来て突然何かミスをやらかして部隊の皆の足を引っ張らないかという不安が押し寄せてきた。

それどころか、俺のミスによって皆に壊滅的被害が及ぶのではないかという、最悪な方向に考えてしまった。

ビスマルク「どうしたの？」

リク「俺、ここに来て不安になって来ました……自分のミスでこの部隊が壊滅的被害を被るのではないのかと……」

ビスマルク「私も初めての出撃ではあなたみたいな不安を抱いていたわ」

プリンツ「当然、私もそんな感じでしたよ」

リク「マジか……」

陽炎「皆、初の実戦は不安を抱くものなのよ、だから気にしなくてもいいんじゃないかな？」

不知火「そんなことを気にしては戦いに支障が出ます、最悪な方向には考えないようにしましょう」

黒潮「大丈夫や、うちらが着いてるで」

リク「ありがとう、皆」

どうやら、俺のさつきみたいなの不安を抱くのは当然らしい。それを聞いて幾分気持ちに余裕が出来た。

皆、悪い方向に考えるもんなんだな。世の中完璧な人間はいないということを実感させてもらえるやりとりだった……とその時。

プリンツ「皆さん！敵影です！」

とプリンツちゃんがかぶと、前方の海面に3体の影が見えた。

ビスマルク「皆！戦闘準備に入って！」

??「「シヤアアアアアアア!!」」

リク「うおっ！」

プリンツ「来ましたね！」

陽炎「不知火！黒潮！迎え撃つわよ！」

不知火・黒潮「おお！」

そしてそこから3体の駆逐イ級が現れ、その内の1体が口の中にある主砲から陽炎目掛けて砲撃を放ってきた。

陽炎「甘いわ！」

それを難なく避けた彼女はそこから反撃に転じてその個体を倒し、続いて不知火と黒

潮も別の2体を仕留める。俺は彼女達と初めて会った時に感じていた息のあったコンビネーションをまじまじと見つめていた。

不知火「ぎつとこんなものです」

黒潮「リックはん、見てた？」

リック「ああ」

プリンツ「また来ます！」

イ級「シャアアアアアア！」

すると再び前方からまた敵影が現れ、そこから別の個体が飛び出して来た。

リック「やってやろうじゃねえの！」

咄嗟に砲口を奴に向け、先ほど3人がやって見せたように速攻で撃沈させる。殺られるまえに殺って見せた。

プリンツ「敵に攻撃される前に倒すなんて……」

ビスマルク「リック君、あなたすごいわね」

リック「すぐくはないですよ？3人の真似をしただけです」

本当に彼女達の真似事をしたただけなので実際はそれほどすぐくはないと思う。攻撃される前に倒したというのもただのまぐれだろう……なんて考えている俺の背後から、今度は軽巡ホ級が現れた。

プリンツ「やあ！」

それに反応したプリンツちゃんが瞬時に俺の背後に忍び寄るホ級を仕留める。

プリンツ「リック君！油断は禁物ですよ！そこで気を緩めると大変ですよ！」

リック「あ、ごめん」

ビスマルク「初めてだから無理はないと思うけど、戦場では常に警戒を怠らないでね」

リック「以後気をつけます……」

今度からは気をつけないとな……。俺は奴の接近に気づけなかったから、もしあの時プリンツちゃんの反応が遅れていたらと思うと恐ろしくてたまらない。

また死ぬのは嫌だからしつかりと反省するでしょう……。

陽炎「また別の奴らが来るわ！」

リック「まだいるのか」

黒潮「今度は重巡と雷巡やな」

そこに先ほどの個体よりもさらに強力な深海棲艦、雷巡チ級と重巡リ級がそれぞれ2体ずつ現れた。

おそらく、奴らが主力なのだろう。チ級は女性の身体に近くなってるし、リ級はもう完全に女性体となっている。

ビスマルク「ここは役割分担しましよ」

5人「はい？」

ビスマルク「まず重巡を私がやるから、あなた達は雷巡をお願い」

プリンツ「分かりました！」

リク「それじゃあ陽炎型トリオ、俺とプリンツちゃんの二チームに分かれようか。まとめて相手にするのもいいが、それよりも分担してそれぞれ相手にして倒すほうが合理的だからな」

陽炎「分かったわ、そっちはよろしく！」

リク「おう！」

こうして役割を決め、4人とは一旦別行動を取ることに。

ビスマルクvs重巡り級2体

ビスマルク「さあ、かかってらっしゃい」

り級2体「……」

ビスマルクに促されるがまま、2体の重巡り級が挑発に乗るように砲撃を放つ。

ビスマルク「効かないわ」

だが2体が放った砲撃は彼女には通用せず、当たったはずの砲弾は弾かれて水中に落ち沈んでいった。

ビスマルク「いい？砲撃というのはこういうものよ！」

逆に彼女の放った砲弾が、1体のリ級を沈める。

リ級「ッ!？」

仲間が一撃で倒されたのを見たもう1体は連撃によって彼女を沈めようとするが、焦っていたためかすべて不発に終わり……。

ビスマルク「では、さようなら」

彼女に砲弾を命中させられ撃沈した。

ビスマルク「ざつとこんなものよ」

まさに秒殺である……。

陽炎型トリオvs雷巡チ級

陽炎「3対1、おとなしく退散してくれれば見逃してあげてもいいけど？」

不知火「あなたに勝ち目はないです」

黒潮「ほな、どうするんや？」

トリオは対峙している雷巡チ級に降参の猶予を与えるが……。

チ級「……ッ!!」

チ級はなめるなど言わんばかりに砲撃を放ち抵抗してくる。どうやら逃げる気はさらさらないようだ。

陽炎「あくまで私達とやり合うってわけね」

不知火「しょうがありません、ここは散っていただきましょう」

黒潮「覚悟するんやで？」

チ級「……ッ!!」

トリオはチ級を包囲するように陣形を組み、逃げ道を封じた。

チ級「……ッ!!」

周囲を囲まれ逃げ場を失ったチ級は砲撃で抵抗するものの……。

陽炎「私達を本気にさせた時点で、あなたの負けは決まっているの」

不知火「それでも諦めないのは賞賛に値しますが……」

黒潮「でもな、それを無駄なあがきと言うんやで」

3人「さようなら」

トリオをやる気にさせてしまったチ級にもはや逃げ場などなく、3人の集中砲火によつて倒された。

3人「任務完了つと」

リク・プリンツ vs 同名

リク「さあやるk……」

チ級「……ッ!!」

リク「やべ！」

プリンツ「横に避けましょう！」

こちらが戦闘態勢に入ろうとするなり先制攻撃を仕掛けてきたチ級だったが、サツと難なく避ける。

チ級「……ッ!?!」

リク「これでも食らえ！」

プリンツ「えいつ！」

奴の先ほどの攻撃を回避した後背後に回りこみ、お返しと言わんばかりに息ぴつたり
に反撃を仕掛け命中させる事に成功した。

リク「決まった！」

チ級「……ッ!?!」

プリンツ「効いてるみたいですね！」

リク「それじゃあ一気に畳み掛けるぜ！」

千級「……ッ!!」

だが奴も負けじと反撃してきたためそれを回避した。

リク「危な……」

プリンツ「まだ弱い部類とはいえ、そう簡単に倒させてはくれませんね」

リク「ああ……だがあいつの攻撃の中で一番脅威なのが雷撃なんだよな……」

プリンツ「雷巡ですからね」

その間にも、奴はこちらを仕留めようと砲撃の手を緩めなかった。それでも何とか避けていく。

リク「なんとか雷撃をぶっ放してくるまでに仕留めたいな……」

プリンツ「でも攻撃が激しいから反撃に転じれないし、このままだと次第にジリ貧になっちゃいますよ」

リク「早いところカタつけねえときついな」

だがそうしようにも奴の砲撃が鳴り止まない以上は……。いや、待てよ？ 艦装を破壊すれば奴は何も出来なくなるんじゃないか!?

そう思い立ち、奴の猛攻を回避しながらプリンツちゃんにとある作戦を耳打ちする。

リク「いい事思いついちゃった!」

プリンツ「なんですかそれ!」

リク「攻撃手段を潰せばいいんだ！」

プリンツ「なるほど！そうすれば棒立ちに出来ますね！」

リク「おそらく艦装を破壊されたあいつは逃げようとするだろうから、直ぐに逃げ道を封じるように立ちふさがって、そのままジエンドって寸法だ！」

プリンツ「いいですねそれ！」

よし！実行しよう！

リク「俺があいつを引き付けるから、君はその隙に艦装を破壊するんだ！」

プリンツちゃん「はい！」

リク「こっちだぜ！」

チ級「……!!」

奴を引き付けるため、わざと砲撃を外し注意をこちらにそらす。

プリンツ「行きます！」

チ級「……ッ!？」

俺の思惑通り、奴はこちらに意識が集中し、その隙を突いてプリンツちゃんが砲撃で奴の艦装を破壊した。

リク「トドメと行くか！」

プリンツ「はい！」

千級「……ッ!!」

艦装が破壊され何も出来なくなった奴はその場から逃走しようとするが、もちろん逃がすわけには行かないためすかさず奴を囲い逃げ道を封じた。

リク・プリンツ「行けえ!」

そして、奴は一步も動けないまま艦装を破壊した後すかさず挟み込むという俺の作戦によって倒されたのだった。

リク「終わったな」

プリンツ「リク君のあの作戦、完璧です!」

正直前と後ろに陣取っただけで左右には普通に逃げ道があったためそこから逃げられる可能性はあったが、ああいう作戦を執行した上に逃げるといふ選択肢まで消そうとした俺達を前にさすがに観念したのか、そのまま棒立ち状態で一切動くことはなかった。

今回こうやって初めて敵と戦い倒したわけだが、ふと俺の中で正体不明の罪悪感がこみ上げてきた。

リク「……」

プリンツ「リク君?どうかしました?」

リク「いや、なんでもない」

多分、それは敵とはいえ殺めた事なんだと思う。放っておけばいずれ取り返しがつかない事態になる恐れがあるため倒すのは当然の事なのだが、それでもどうも落ち着かない。これについてはひたすら慣れるしかないな……。

その後、俺達に続いて敵の討伐を終えたピスマルクさん、陽炎型トリオと合流し、鎮守府へと帰還したのだった。

14話 フラグシップ

初めての出撃から帰還し、帰ってすぐに長門さんに戦果を報告する。

彼女は「初めての出撃にも関わらず、よく目立った傷を負わず帰還できたな」と、素直に絶賛してくれた。

だがホ級が俺の背後から接近してきたあの時、プリンツちゃんの反応が遅れていたらずまず無事では済まさなかった。故に目立った傷を負わなかったのはあの時彼女の反応速度が優れていたからこそだ。そのためそれは純粋な自分の実力で得たものではないのだ。

今後、彼女や皆に助けられるばかりではいつまで経っても成長は出来ないため、いつにも増してトレーニングに励む事にした。

そして3日後、再び鎮守府から離れた場所に敵の生体反応があったことを受け、前と同じように迎撃に向かうことになった。

以前は浜風達がいなかったが、今回は彼女達が所属している部隊と共に出撃しているため、仲のいい艦娘全員で戦うことが出来ることに大層喜んだ。

さて、行動を共にしている部隊に所属している艦娘は、それぞれ浜風達3人のほかに

以前あいさつ回りに向かった時に遠征に出ていて不在だった磯風、谷風と、初めて食堂に行つた際に挨拶した潮だった。

どうやら彼女は実戦の経験に乏しいらしく、せつかなので俺達第一水上打撃部隊と彼女が所属している第二水雷戦隊との合同で出撃する事となつたのだ。

プリンツ「もうすぐ反応があつた地点に到着します！」

リク「今回の深海棲艦はどんな奴らなのかな？」

ビスマルク「それは分からないわね」

潮「……」

浜風「大丈夫？潮」

と浜風が俯いたままの潮に話しかけた。どうやら緊張しているようだ……。

潮「ちよつと……大丈夫じゃないかな……」

鹿島「不安なのね？」

潮「はい……」

出撃する前から分かつていた事だが、彼女は今不安を感じているらしい。

潮「私……皆の足を引っ張りそうで怖いんです……。私のせいで部隊が壊滅的被害を被るなんて考えてしまつて……」

昨日の俺と同じようなこと言っているな……。それだけ不安が苛まれているのだろ

うが、これについてはひたすら慣れるしかない。

俺も初出撃の際は彼女と同じだったためその気持ちは痛いほどよく分かる。

潮「それに私、最近着任したから……」

リク「えっ、そうなの？」

プリンツ「ちようどリク君がやってくる前日に着任したんです」

リク「なるほど」

浦風「そしてうちら第二水雷戦隊に空気があつたからそこに入れられたけんねえ」

リク「ほうほう」

てことは彼女は俺と境遇が似ているのか……。最近やってきた事、実戦に乏しい事、空気があつた部隊に入れられた事などなど。こうなると色々好感が持てるな。この出撃を通して彼女と一緒に経験を積んで行けると思うと嬉しさがこみ上げてくる。

潮「出来れば……私を守るようにして戦ってくれませんか……？」

リク「お安い御用さ！」

つい張り切つて最初に声を出してしまったが、調子に乗りすぎてしまった……。

リク「あ、すいません」

磯風「なぜ謝る」

ビスマルク「ま……まあそのくらいなんてことないわ」

鹿島「守つてあげます、潮さん」

プリンツ「私達に任せてください！」

潮「あ……ありがとうございます！」

スバアン

その時、前方から何かが水中から飛び出てくるような音が聞こえた。

リク「来たか？」

プリンツ「ええ！敵影です！」

潮「敵だ……」

それからまもなく、4体ほどの雷巡ち級が現れる。

リク「ち級の奴ら今回は4隻で出てきたな」

プリンツ「前に倒した仲間の仇を討つような表情をしています」

陽炎「相当お怒りのようね」

磯風「しかも見ろ、赤いオーラを放ってるぞ」

黒潮「ほんとや」

磯風の指摘どおり、ち級は4体全て赤いオーラを放っていた。それはエリートという強化版で、戦闘能力は通常版を上回る。それよりもフラグシップというさらに上のランクがあるのだが、強さは察してくれ。

とりあえず、今は目の前の敵を倒すことを考えよう。

陽炎「奴らは私達が引き受けるから、鹿島と浜風と浦風は潮の護衛をお願い」

鹿島「はい」

浜風「ええ」

浦風「任せとき」

三人は陽炎の指示を受けて、潮を守るように彼女の周囲を陣取った。

まだ三人がどれほど強いのかは分からないけど、陽炎から護衛を任せられるくらいだから相当の練度なんだろう。

ビスマルク「仇を討つだなんて感動させてくれるじゃない。だけど私達は海の平和のために戦ってるの」

すかさず、ビスマルクさんが砲撃を放ち1体を沈めた。

陽炎「悪く思わないでね」

不知火「沈んでもらいます」

黒潮「行くで！」

続いて、陽炎型トリオが息の合ったコンビネーションでもう1体を沈める。

チ級「……ッ!!」

リク「おっと、させねえぜ！」

仲間を沈められたことで怒った2体が直進し、こちらに砲撃を放ってくるが、俺はすかさず奴らの砲撃を自らも攻撃して相殺する。

それによって黒煙が舞い散り奴らの姿が見えなくなるが、かすかに姿が見えてきたのを磯風は見逃さなかった。

磯風「ふん！私の目は誤魔化せないぞ！」

谷風「何かツコつけてんの、早く撃つよ！」

2体の姿を捉えた二人は黒煙に向かって砲撃して一体を沈め、残るは一体のみとなった。

潮「す……すごい……！」

鹿島「あれが敵との砲撃戦です、参考になりましたか？」

潮「ちよつと……自信が持てるような気がします！これなら私にも出来そう……！」と感心する彼女。これなら敵とも渡り合えるかな。

リク「じゃあ最後は華麗に……！」

プリンツ「私とリク君でトドメを刺します！」

いざ行動に移そうとしたその時……。

チ級「……！」

ビスマルク「待って！」

リク・プリンツ「ん？」

ビスマルク「あいつの様子がおかしいわ……」

彼女の指摘どおり、奴は俯いてその場を一步も動こうとしない……。一体何事かと思つたら、突然奴が顔を上げこちらを睨んできた。

なんだあいつ、残り一体となったことで諦めたのか？それとも何だ、この状況を打開する考えでもあるのだろうか？奴ら、俺の背後から奇襲を仕掛けてきたり、自らの戦況が不利になるなり逃亡しようとしたり、仲間のことを想つたりと知能は高いようだからな。

チ級「……ッ!!」

リク「ファッ!？」

なんと、赤いオーラだったのが黄色いオーラに変化し、雷巡チ級フラグシップに進化を果たした!どういう原理なのこれ……。

ビスマルク「どうやら、危機センサーが発動したようね……」

リク「危機センサー!？」

ビスマルク「深海棲艦の極めて少数の個体に備わっている潜在能力のようなものよ」

リク「なんですかそれ……」

ビスマルク「絶体絶命の状況に陥ると、上のランクに覚醒するの。中には細胞に変化

が生じて、さらに上の艦種になることも極稀ながらあるみたい……」

リク「つまり、奴は自分がどう見ても勝機がないこの状況に覚醒したと？」

ビスマルク「まあ、そんな感じね」

なんか、経験を積むと進化する某生物みたいだな……。それに絶体絶命の状況に覚醒するとかどつかで聞いたことがあるような……。

とにかく、奴がさらに強化されたことは間違いないようだ。

潮「……怖くなんか無い……」

浜風「無理はしなくていいわよ」

鹿島「あなたは私達が責任を持って護衛するから」

浦風「奴が攻撃してきたら先ほどのリクのようにこちらが相殺させるけんね」

潮「……」

リク「よし、行くぞプリンツちゃん！」

プリンツ「はい！」

うだうだ言っているも仕方ないため、ここは俺達に任せてもらおう。

ビスマルク「大丈夫なの？プリンツはともかく、リク君はまだ慣れてないんでしょ？」

リク「俺だって男子ですからね、こんなことで怯える場合じゃないんですよ。それに、まだ敵が来ないとも限りませんからね、皆はそっちの処理を頼みますよ」

ビスマルク「分かったわ、だけど無茶はしないでね」

リク「ええ」

プリンツ「では、行きますよ！」

チ級「……ッ!!!」

奴もやる気みたいだ。3日前と同じようにプリンツちゃんとのコンビネーションで倒してやんよ！

15話 統率者

チ級「……ッ!!」

リク・プリンツ「よっ!」

チ級「……ッ!!」

リク・プリンツ「はっ!」

フラグシップになりさらに強化された砲撃をぶっ放してくるチ級。心なしか次の砲撃に移るまでの時間が短くなっている気がするな……。

リク「食らえ!」

プリンツ「ファイヤー!」

チ級「……」

奴の攻撃した後の一瞬の隙を突いてプリンツちゃんと一緒に強力な一撃を放つものの、回避力も上昇しているためか難なく避けられてしまう……。

リク「フラグシップって改フラグシップを除けば最強だよな……」

プリンツ「そうですね、雷撃を食らったらただでは済まないでしょう」

リク「そうなるまえに殺ってやるぜ!」

プリンツ「はい！」

それぞれ奴の左右に回り込み死角からの攻撃で翻弄を試みるものの、奴は反応速度も優れているようで、まるで見切ったつと言わんばかりに相殺してくる。おそらくそのまま攻撃し続けても俺たちに疲労が溜まりジリ貧になってしまいうだろう。

所詮は雷巡であるため当たりさえすれば相当のダメージを与えられるはずなのだが……。

リク「どうしたものか……」

プリンツ「次の砲撃が来ますよ！」

リク「たく、休む間もねえな！」

その後は勢い付いた奴の猛攻が始まり、俺たちは回避するので精一杯だった。ダメージを与えるどころか攻撃態勢に入ることすら間々ならず、疲労だけが回避する度どんどん蓄積して行った……。

やがて……。

プリンツ「リク君！見てください！」

リ級「……」

リク「ま……まさか」

プリンツ「そのまさかですよ！」

奴の下半身の機械の歯をむき出した部位から何かが放たれた。魚雷だ、魚雷による雷撃が放たれたのだ。

プリンツ「魚雷です！ ついに放たれました！」

リク「まずい！ 俺たちの後ろにはビスマルクさん達がいる！」

プリンツ「もしかして……彼女は私達がビスマルクお姉さま達のいる位置がピッタリ真後ろになるように移動した瞬間を狙って雷撃を放ったのでは……？」

リク「チツ……」

このままではビスマルクさん達に直撃して大きな被害が出てしまう……。いくら戦艦の彼女といえど、雷巡、しかもフラグシップの雷撃の直撃を受ければただでは済まない……。こうなったら……。

リク「俺たちも魚雷で対抗だ！」

プリンツ「はい！」

物は試しと俺達も魚雷を発射し、奴の雷撃に命中させて相殺を試みる。すると俺の狙い通りにはいかなくとも魚雷の発射速度を低下させることに成功した。

プリンツ「リク君！ 勢いが弱まりましたよ！」

リク「これなら後は……とりやあ！」

俺は瞬時にスピードが弱まった魚雷を蹴飛ばし、奴に跳ね返した。

チ級「ツ!？」

リク「どうだ!」

まさか自分で放った雷撃を自ら食らうなんて微塵も思っちなかっただろう。奴は跳ね返ってきた魚雷を避けることもせず、無反応のままそれを受けてしまった。

しかもそれが功を奏したのか、または当たり所が悪かったのか、奴はその一撃で大ダメージを負ってしてしまった。俺が蹴飛ばしたことでその勢いが再びついてしまったのが要因だろうか? まあいい。早く楽にしてあげよう。

リク「ほいじゃあ、行きますか!」

プリンツ「ええ!」

トドメを刺すため、砲口を奴に向けた、その時……。

リク「ん?」

プリンツ「なんででしょうか? 急に空が真っ黒に……」

リク「いや、空だけじゃねえ、霧まで出てきた……」

しかもそれはなぜか俺とプリンツちゃんの世界にだけ……。なんか嫌な予感がする……。

?? 「結局、仇ヲ取ル事ハ出来ナカツタノネ」

?? 2 「不甲斐ナイゾ」

リク「誰だ!？」

プリンツ「あなた達は……」

突如、大破したチ級を囲うように2体の深海棲艦が現れた。2体とも、完全に女性の容姿をしている。

リク「こいつらは……」

プリンツ「ええ、空母ヲ級と戦艦ル級です!」

ヲ級「アナタ達ネ、コノ子ヲヤツタノハ」

リク「ああそうだ、てか見れば分かるだろ」

プリンツ「私達のコンビネーションでやっつけましたよ!」

ル級「ソウカ」

なんだこいつら、カタコトではあるが言葉を喋ってやがる……。しかも今までの奴らよりもとてつもない威圧感を感じるし、深海共のボスなのか?そんなことは今はどうでもいい、それよりもこいつらを倒さねば!

リク「お前達が深海のボスなのかは知らないが、現れたからには覚悟してもらうぜ!」
プリンツ「あなた達もこの子のようにしてあげます!」

ヲ級・ル級「……」

戦闘態勢に入る俺たちだったが、奴らは微動だにしなかった。

プリンツ「どうしましたか!？」

リク「戦う気はねえようだな?それとも俺達はまだ取るに足らんってか?」

ヲ級「……私達ハ無駄ナ戦ハシナイ主義ヨ」

ル級「ソレニ今ノオマエ達デハ私達ニハ敵ワナイ、勝テヌ戦イハシナイ事ダ」

リク「舐めやがって……」

奴らのこの余裕綽々な態度、どう見ても統率者の風格だ。

ヲ級「アナタ、加藤リク……ネ?」

リク「ツ!？」

なんでまだ名乗ってないのに俺の名前を……いや、プリンツちゃんですら俺のことを知っていたし別に驚くことではないか……。

ル級「コノ借りハイツカ返スゾ」

リク「……」

ル級「アトコレハ忠告ダ」

リク「あつ……?」

ル級「海洋生物ノ悪霊、海異鬼ニハ精々気ヲ付ケロ」

リク「なんだと……?」

プリンツ「私たちのことを心配してるのですか?」

なんだいきなり……俺に対して借りを返すと言ったかと思えば海異鬼に気をつけろ
だあ？こいつら敵の癖に随分俺たちの身を案じてくれてるじゃねえか。

ル級「アクマデオマエ達ヲ倒スノガ我々深海棲艦ダカラ言ツタ事ダ」

ヲ級「アナタ達ハ私達ガ倒スト決マツテイルノ、宿敵ヲ奴ラ海洋生物ノ悪霊ニ取ラレ
ルノハ嫌ダカラネ」

宿敵……ねえ。

プリンツ「……」

リク「ありがとよ、別に敵であるお前らに感謝する筋合いはねえけどよ」

ル級「デハ、マタ会エル日ヲ楽シミニシテイルゾ」

ヲ級「ジャアネ、加藤リク、アナタノ事忘レナイカラネ」

そう言つて奴らは大破したヲ級を連れて霧の奥へと姿を消した……。

その後、霧が晴れ黒雲も消えて青空が戻った。

リク「……」

プリンツ「……行っちゃいましたね」

リク「宿敵……か」

陽炎「おい！」

黒潮「リクはーん、プリンツはーん」

と陽炎と黒潮の声が聞こえてきて、ビスマルクさん達が俺たちの下にやってきた。不知火「大丈夫でしたか!？」

浦風「びつくりしたじゃけえ、突然消えちゃうんだもん」

リク「大丈夫だよ」

プリンツ「はい」

どうやら、彼女達から見れば俺たちは突然消えてしまったんだな。潮も心配そうに俺達を見ている。

潮「大丈夫でしたか……?？」

リク「ああ、心配かけてごめんな」

潮「いえいえ……それよりも私、頑張りました!」

プリンツ「どういうことですか?」

陽炎「もうね、すごいんだから!」

リク「?」

ビスマルク「私から説明するわ」

彼女の口から語られたのは、自分達の布陣において潮が目覚しい活躍を遂げたという話だった。俺達が千級と戦うために離れた後、自分達の下に別の深海棲艦が数十体ほど現れたらしく、そこで潮が自ら前線に立ってなんと一人で半数以上を倒したとの事。

それを聞いた俺は彼女のとてつもない潜在能力を感じた。さつき俺たちが戦っていた奴に似た……ね。いや、もはやそっくりだ。

やっぱり、普段は大人しい奴が戦いになると豹変するというのはもはやテンプレなのかなあ。

ビスマルク「以上よ」

浜風「リック達はもう倒したんでしょ？ 敵」

プリンツ「それが……」

リック「トドメを刺す寸前までは追い詰めたんだが……」

磯風「その様子だと何かあったみたいだな」

リック「まあね……」

俺とプリンツちゃんは事情を説明した。トドメを刺す寸前に深海勢のボスと思われるヲ級とル級に奴が連れて行かれた事、その際にル級から海異鬼に注意するよう忠告された事。そして奴らが俺の名前を覚えていたことに関して……はどうでもいいから伝えず。

ビスマルク「なるほどね」

リック「逃がしてしまったから今後さらに強化されて襲ってくるかもしれない……トドメを刺せなかったことをお詫びします」

プリンツ「ごめんなさい」

鹿島「別に気にしませんよ」

浜風「心配しないで、過ぎたことよ」

ビスマルク「ええ、そうね」

谷風「それにしても、海異鬼に気をつけろだなんて、随分やさしいんだね」

浦風「それうちも思ったわ」

やさしいっていうより、俺達という宿敵を取られたくないというプライドみたいな思
いだったみたいだな。

他の娘達ならともかく、何も俺みたいな奴に執着しなくてもいいと思うが……。

潮「とりあえず……敵を駆逐したんだし鎮守府に戻りませんか？」

黒潮「そうやなあ、お腹ペコペコやわ」

ビスマルク「今回も大したダメージを負わなかったし、入渠は必要……あるわね」

リク「それはいります」

プリンツ「念には念を、ですよ！」

不知火「まあ、そうなりますね」

陽炎「帰還したら入渠するのは基本だしね」

リク「あはは、そうだな！」

なんかこう、確実にプリンツちゃんとの連携プレイが出来てるといふこの感覚……た
まらないぜ。

16話 海の襲撃者

プリント「第一水上打撃部隊と第二水雷戦隊の連合艦隊、ただいま帰還しました！」

大淀「お疲れ様です」

出撃から帰還した俺たちを3日前と同じように大淀さんが出迎えてくれ、手に持っているメモ用紙にメンバーのダメージ及び敵の撃破状況を記録している。

彼女はこうやって帰還した艦隊の成果を記録する役割を担っている。今回は潮が少しながら傷を負ったもののそれ以外は特に大きな被害は無く鎮守府に帰還する事が出来た。

潮「少し被弾してしまいました……」

リク「大丈夫？」

潮「はい、このくらい大丈夫です……」

何せ初出撃ながら敵の半数以上を撃沈させたのだから、多少なりともダメージを負う事は仕方ない。

プリント「(リク君)」

リク「(どうした?)」

プリンツ「(深海の統率者と出くわした事を伝えましょうかね……)」

リク「(いや、伝える必要はないと思う。交戦しなかったんだし)」

プリンツ「(分かりました)」

大淀「二人ともどうしました？」

リク「なんでもないです」

プリンツ「はい」

大淀「ならいいんですけど」

まあ、伝えないほうが賢明だな。記録係の彼女を混乱させるわけには行かないし。奴らに忠告された事も今は俺とプリンツちゃんの心の中に留めておこう。

大淀「では潮さんは入渠するとして、他の皆さんはどうしますか？」

リク「お願いします」

プリンツ「私達もダメージは負わなかったとは言え、疲労抜きは大事ですし」

ピスマルク「それに出撃の後に入渠が基本ですしね」

陽炎・不知火・黒潮・浜風・鹿島・浦風「お願いします！」

大淀「分かりました、ではその入渠施設の中に入ってくださいね」

一同「はい！」

入渠は言い換えれば入浴なので、疲労も回復する効果がある。たとえノーダメージだ

としても疲労は蓄積されると後に響くため、基本的に帰還後は全員入渠することにして
いるのだ。

リク「なあプリンツちゃん」

プリンツ「はい？」

リク「やつぱり男子風呂ってないよねここ……」

プリンツ「そもそも男の人が来るなんて想定してませんからね、明石さんに頼めば職
人妖精さんを通して造ってもらえるかもしれないませんが」

リク「わがままは言えないな……」

当然というか、今入渠しているのは俺を除いて全員女の子だ。現実ではまずありえな
いシチュエーションであり、混浴を除けば即捕まるレベルと言ってもよい。

もちろんそんな状況で全裸になるわけにはいかないので入っている間は海パンを着
用しているものの、それでも第三者視点からすれば一人の変態野郎が女子風呂に忍び込
んでるようにしか見えない。無論彼女達も大事な所が見えないよう水着を着用してい
る。

最初はほぼ全員が俺が湯に浸かっているのを変な目で見ていたが、最近では慣れた為

か平然としている。それはそれでいいのだが、俺からすれば無理している感も否定できない。自分も風呂に男一人のため今だ恥ずかしいし、しかも慣れる気がしない。

数分後、バケツがかけられ傷が癒えた為俺たちは風呂から上がる。プリンツちゃん達は自分の着替えが入っているロッカーの前に立ち、俺はすぐ近くにある個室に入っていく。

勿論、彼女達が着替えてる横で俺がいたら間違いなく他の子達からの印象が悪いし、絵面的にも極めてよろしくない。陽炎達からの評価も著しく低下してしまうだろう。まあ、プリンツちゃんは大して気にしてないと思うが。

リク「さて、そろそろ終わったかな」

着替えを終えて2分ほど経ったため、個室から出た俺だが……。

プリンツ「あつ……」

リク「……」

ガチャン

プリンツ「なんで戻ったんですかね？」

ビスマルク「早く着替えを終えなさい……」

プリンツ「はわっ」

リク「プリンツちゃん……まだ着替えてなかったのかよ……」

そんなこんなで入渠を終え、司令室にて長門さんに戦果の報告を行った後、食堂に向かい昼食を取った。戦いを終えて帰ってきたためか結構お腹が空いていたため、ご飯を3杯もおかわりしてしまった。他の皆は鹿島を除いて6杯だった……。

リク「ふう食った食った」

不知火「もう少しおかわりすればよかったですね」

リク「いやまだ足りないのかよ」

不知火「別にそういうわけでは……」

プリンツ「私はまだ食べたかったです」

リク「俺はもういいよ……」

ビスマルク「艦娘たるものたくさん食べて体力をつけないとね」

リク「つまり俺も見習えと？」

ビスマルク「別にそういうわけじゃないわよ」

陽炎「リクつたら言葉通りの解釈しすぎよ」

リク「すまん……」

それにしても入渠したおかげで疲労は取れたものの、これからどうしようか。長門さんから今日はゆっくり身体を休めろとは言われたものの……。

とりあえず、部屋に戻って寝るか。

リク「ん…………ど…………どここは…………」

ふと目をあけると、真つ暗な闇が広がっていた……。確か俺、ビスマルクさん達と別れた後、プリンツちゃんと一緒に眠りについていたはずだ……。だが彼女の姿はここにはない……。てことはこれは俺の夢なのか……。？にしては現実的過ぎないか……？

??「思イ知ラセテヤル……我々ノ……海異鬼ノ恐ロシサヲ！」

リク「ッ!？」

突然、何者かの声が聞こえてくる……。海異鬼つて言つてたよな……？

??「マズハ、一人ノ人間ガヤツテキタラシイアノ鎮守府ノ奴ラヲ血祭りニ上ゲル！」

リク「何言つてるんだ…………!？」

何なんだよ……。何で俺達がいる鎮守府を狙つてやがるんだ!?!しかも奴は俺があとここにやってきたことを知っている……。俺の動向を監視していたとでも言うのか……？分らない…………。

それに奴らは深海棲艦が制海権を奪取したことによって海が汚染された結果、無念の内に果てた海洋生物の怨念が実体化して生まれたと聞いているぞ？攻撃する標的が違
う!

おそらくこれがビスマルクさんの言っていた艦娘を自分達が死んだ要因を作った元凶と見ているという事なのか……。

何にせよ、これは皆に伝えるべきか？それとも深海の統率者と会った事のように内密にすべきなのか？とりあえずは早くこの薄気味悪い空間から脱出したい……と俺が願った直後、ここで意識は途切れた……。

リク「うーん……」

プリンツ「あ、目を覚ました」

リク「プリンツちゃん……」

目を覚ますと、プリンツちゃんが心配そうな眼差しで俺を見つめていた。

プリンツ「大丈夫ですか？随分驚かされていたみたいですけど……」

リク「あ……ああ」

プリンツ「変な夢でも見ました？」

リク「ちよつとな……」

プリンツ「でもなんともなくてよかったです」

あれは海異鬼が見せた悪夢？それとも統率者の一人が言っていた事の暗示だったの

だろうか……。とりあえずあの事はプリンツちゃんにも言わないことに……。いや、彼女にだけは伝えておくべきかもしれない。

リク「実は……」

プリンツ「なんでしよう？」

リク「俺、奇妙な夢を見たんだよな……」

プリンツ「奇妙な夢？」

リク「ああ……」

俺は彼女に夢で見た事の詳細を伝える。

リク「とうわけなんだ」

プリンツ「なるほど……海異鬼がここを襲撃することをほのめかしていたと」

リク「ああ、過去にも海異鬼が襲ってきたことってあるのか？」

プリンツ「はい、何度かありましたね。そのたびに数多くの艦娘達が傷を負いましたが、死人は出ませんでしたよ」

リク「そうか……」

だが奴らによって命を落とした人は数多いだろうな……。この鎮守府の皆はおそらく戦闘慣れしているから死者が出なかつたのだろうが、他の鎮守府の艦娘はどうなんだろう……。

プリンツ「彼らは水中型と陸上型、それに加え空中型の3つに分けられるのですが、襲つてきた海異鬼はほとんど陸上型ですね」

リク「ふむふむ……」

奴らにも種類があるな……。これは俺の独断だが多分彼女たちにとって一番不利なのは空中型だな。空を自在に駆ける敵相手には標準を合わせ辛いし、なにより滞空時間が長すぎて低い位置に中々下りてこないという事態にもなりうる。まあ、これは某狩ゲーをやったことがあるため持ち出した考えにしかすぎないが。

リク「なあ、伝えようか……?」

プリンツ「いや、接近に気が付いたらアウンスがあると思うのでわざわざ伝える必要はないと思います」

リク「そうか……」

プリンツ「それよりももう一眠りしますか?」

リク「そうするよ……」

そう返答して俺は再び目を閉じる。

プリンツ「おやすみなさい」

男性船員「前方後方、左右何の異常もありません」

船長「そうか」

波も風も穏やかなどこかの海域にて、海上を航海している一つの船があった。四方のどこにも異常はなかったように思えたが……。

ガシャン

船長「なんだ!?!」

女性船員「船長! 下のほうから強い衝撃とともに何か衝突した模様です!」

船長「なんだと!?!」

突然船底から強い衝撃が聞こえてきたのだ。周囲には岩らしきものは確認できず、衝突するような要素は何一つなかったにも関わらずだ。

船長「深海棲艦の仕業か!?!」

女性船員「潜水艦でもなければそれは不可能です! ですがそれらしき影は海面からは確認できず……」

船長「じゃあ一体何が……まさか!?!」

船長が感づいた時にはもう既に遅く、一瞬の内に大穴が空けられ姿勢を維持できなくなった船は海の底に沈んでいった。

そして、その海中にいた5体ほどの角を生やした生物のような影が共に沈んだ船員

達を捕食し、姿を消したのだった……。
船を襲撃したのは恐らく……。

17話 夜の戦場 前編

一同「ご馳走様でした」

号令とともに合掌して夕食が終わる。あれから俺は海異鬼の夢の事はプリンツちゃん以外の人には口外していない。接近に気が付いたらアナウンスを通して知らせてくれると思ったのは勿論だが、なによりここにいる全員を不安に駆らせるわけにはいかなかったと判断したためだ。

もちろん、彼女達はほぼ全員戦闘慣れしているため知らせても迎撃の意思を見せるだけだとも考えているが、ここには潮のような海異鬼の存在を知らない子もいるという事も見据えているため、伝えないほうがいいのに越したことは無い。現に今いつもの面子に加え、潮も一緒に食事を取っていたし。なぜ一緒に夕食を食べていたのかというと彼女とは今日の連合艦隊での出撃以降親しくなったためである。

潮「今日の夕食もおいしかったですね」

リク「ああ、いつでも絶品の料理を作ってくれる間宮さんと料理人妖精には感謝だな」
プリンツ「潮さん、もうリク君と打ち解けてますね！」

浜風「それをいうなら私達全員とでしょ」

プリンツ「あはは、そうでした」

潮、何気にコミュニケーション能力が高いんだな。やっぱり、第一印象で判断してはいけないなこりや。

陽炎「ねえ、そういえば今日のニュース見た？」

潮「ニュース……？」

陽炎「うん、なんでも南方海域あたりで航海中の船が突然轟沈したらしいわよ」

黒潮「一体誰の仕業なんやろな」

陽炎「さあ？でも何の前触れも無く急にらしいから、海異鬼の仕業だと思う」

潮「海異鬼……？」

この子、最近着任したから海異鬼知らないんだよね……。ビスマルクさんから教えられた時もあの場になかったし……。長門さんも他の勢力と対峙していることを教えないなんて、彼女の身を案じたのだろうか。

鹿島「数年前から突如姿を現した深海棲艦でも私達艦娘でもない第三勢力です」

潮「第三勢力ですか……」

プリンツ「深海棲艦の制海権奪取による海の侵食で命を落とした海洋生物の怨念が集まって生まれた怪物です」

潮「私達の別の敵ってことですか？」

リク「俺も詳しいことは分からないんだけど、奴ら深海棲艦に恨みを抱いていて、彼女達艦娘に対しても元凶とみなしてゐるっばい」

潮「そんなことが……」

案外平然としてゐるな……。今日の戦いで自信が付いたのかな？

陽炎「本来深海棲艦だけを恨めばいいものを、私達や市民にも怒りをぶつけてくるんだもの」

不知火「言うなればただの逆恨みです」

浦風「決して可哀想だなどと思つちやだめじや。さつき陽炎の言つていた事を聞いていれば分かると思うが、奴らは罪もない人にも無差別に襲い掛かり命を奪つておる。だから深海棲艦と共に最優先で倒さねばならんからな」

潮「はい！さっきの話が本当なら許してはおけませんね！」

これなら心配はいらないかな。

ピンポンパンポーン

とその時、アナウンスのチャイムが鳴った。

リク「ん？」

プリンツ「アナウンスが鳴りましたね」

「総員に告ぐ」

陽炎「長門さんの声よ」

浜風「どうしたのかしら？」

「敵影がこちらに向かつて接近している。敵を迎撃する部隊と、鎮守府周囲を守護する部隊の2つに別れ作戦を遂行する！各自直ちに配置に付くように！」

「どうやら敵がここに近づいてきているらしい。深海棲艦か海異鬼かは分からないが、もしニユースの出来事の主犯が海異鬼である事、昼寝していた時に見た夢が本当ならば、後者である可能性が極めて高い。」

深海の統率者の警告していた事が早速実現することになるとは。

黒潮「せっかくお腹が膨れて気持ちよかったのに、敵を迎撃してカロリーを消費することになるなんてなあ」

浦風「奴らにうちの事情など関係ないってことなんじゃろうな」

不知火「ちようどいいです、腹ごなしの運動にはなるでしょう」

浜風「わざわざ私達の鎮守府を自ら襲うとは、身の程を教えてやらないとね」

鹿島「そうね！」

潮「潮、頑張ります！」

プリンツ「返り討ちにしてやりましょう！」

リク「行くぞ！」

鎮守府周囲の近海では、全員の艦娘達が各自配置に着いていた。敵がどこから現れるか分からない以上、徹底して鎮守府を死守する必要があるのだろう。

俺達水上打撃部隊と第二水雷戦隊の連合艦隊は迎撃側として出撃した。前者の部隊の面子はいつもどおりだが、後者の部隊は磯風と谷風が防空駆逐艦である秋月、照月に入れ替わっていた。

秋月・照月「今回はよろしくお願いしますね！」

プリンツ「はい！」

リク「なんで入れ替わったんだ？」

秋月「磯風さんと谷風さんは鎮守府側の防空担当となつたので、私達が代わりに迎撃側の防空担当となつたんです」

リク「なるほど」

照月「私たちは上空の警戒に専念するので、皆さんは敵の駆除を頼みますね！」

リク「任せとけ」

秋月「じゃあ照月、行くわよ」

照月「うん」

二人は一旦俺達から離れて行った。

?? 「シヤアアアア!!!」

とその直後にイルカのように海面から飛び跳ねながら、角を生やしたイツカクのような姿をした怪物が現れた。

ビスマルク 「来たわよ！海異鬼が！」

リク 「あれが海異鬼か……」

プリンツ 「あいつは海異鬼の中でも最下位に位置するロツカクです！」

ロツカクか、覚えておこう。

ビスマルク 「最下位と言えど深海棲艦の駆逐より強いわよ！」

ロツカクー 「シヤアアアア!!!」

陽炎 「角を射出してきたわ！」

ビスマルク 「避けて！」

ロツカクが額の角を発射してきたが、難なくかわす。どうやら角を砲撃のように発射する攻撃を得意としているようだ。あれが心臓に刺さりでもしたら即死だ。

しかも角を発射しても何度でも生えてくるようで、奴の額からニユキニユキと出てくるのが確認できる。

リク 「お返しだ！」

ロツカク1「ギイ……」

俺の砲撃を食らった奴は一撃で沈黙した。攻撃力は高いが耐久自体は大したことなさそうだった。

プリンツ「次が来ます！」

ロツカク2・3・4「シシャアアアア!!!」

と休む間もなく別の個体が現れる。

ビスマルク「言い忘れてたけど、奴は主砲を隠し持っているから気をつけなさい！」

武器を隠し持っているというのか。なんとも器用貧乏な奴らだ。

ロツカク2「シシャアアア!!!」

リク「口をあけた！」

プリンツ「あれ見てください！」

口を開いた奴の体内から、主砲が姿を現す。体内から出てくる形で主砲が顔をのぞかせるといことは、身体の中に隠し持っているという事になるな。

浦風「気をつけい！放ってくるぞ！」

浦風の言ったとおり、口を開いた奴の主砲から砲撃が放たれた。

浜風「相殺するわよ！」

鹿島「ええ！」

瞬時に二人が奴の砲撃を相殺し、続けて陽炎型トリオが奴に接近する。

陽炎「私達の力、見せてあげるわ！」

不知火「沈め！」

黒潮「砲撃やで！」

まず最初に攻撃してきた方の個体を陽炎が倒し、さらにまだ攻撃していない方の個体を不知火と黒潮が撃沈させた。

ロツカク複数「シヤアアアア!!!」

リク「まだまだいるな」

今度は10体ものロツカクが現れる。奴ら一体何体いるんだ？

秋月「皆さん！前方上空に飛行型海異鬼が現れました！」

照月「撃墜します！」

さらに空からも敵が現れた事を秋月が知らせる。体長3m前後の飛行型海異鬼で、数はざっと20体くらい。

秋月「行くわよ照月！」

照月「うん！」

秋月型姉妹の二人が対空射撃で上空から現れた海異鬼を7体程撃墜するが、残った13体が攻撃態勢に入った。

飛行型海異鬼「フシヤアアア!!!」

秋月「来る！」

照月「突進してくるよ！」

奴らは身体を高速回転させながら秋月達に突撃してくるが、彼女達はスイスイと回避してみせる。あの動き、演習で夕立と時雨が見せたのと同じだ。

飛行型海異鬼「……」

一方の飛行型海異鬼も回避されると同時にすぐさま旋回しながら上空に戻り、今度はロツカクと対峙している俺達に狙いを定めた。

鹿島「彼らが私達を狙いだしましたよ！」

浜風「そんな、こいつらを相手にするのに手一杯なのに！」

浦風「さすがに無理があるぞ!？」

飛行型海異鬼「フシヤアアア!!!」

奴らは生意気にも、どんな手を使っても貴様らを沈めると言わんばかりに威嚇する。

秋月「ちよつとちよつと！あなた達の相手は私達よ！」

照月「勝手に標的を変更しないでよ！」

なんとか奴らの狙いを自分達に変更するように射撃しようとする秋月達だが……。

別の飛行型海異鬼「フシヤアアア！」

照月「秋月姉！背後からまた別のが来たよ！」

秋月「ああんもう！タイミング悪すぎ！少しは空気読みなさいよこの悪霊が！」

自分達の近くに別の5体の飛行型海異鬼が現れたため、7体の狙いを自分達に向けることが出来ずそちらの相手をするハメに……。

陽炎「数が多すぎる！」

不知火「ちよつとピンチです」

黒潮「やばいでえ……」

奴らの数が多すぎて対処が間に合わない！どうすればいいのかと思つたその時……。

潮「任せてください！私がやります！」

ビスマルク「潮!？」

潮が名乗りを上げた。

ビスマルク「あなた一人で13体も同時に相手取るのは無理があるわ！」

潮「大丈夫です！昼での戦いで多勢に無勢は慣れっここですから！」

ビスマルク「でもあいつらはあなたが倒した深海棲艦よりも強いのだよ!?!それに慣れっこだつて言つてもたった1回でしょ!?!海異鬼の恐ろしさも知らないあなたが無茶しないで！」

潮「でも……」

リク「潮、気持ちは分かるが一人じゃ無謀だ。俺も手伝うよ」

プリンツ「私も一緒にやります！」

潮「それだと陽炎さん達が……」

リク「彼女達なら大丈夫だ、一人や二人抜けた所で大した問題じゃないさ」

プリンツ「信じてますからね！」

潮「……分かりました！一緒にやりましょう！」

俺は仲間を信じているからこそ任せるが、13体の敵に潮一人はさすがに無茶なのでその場合は一緒にやるだけだ。ビスマルクさんもそれなら納得しているはずだ。

リク「そいつらの対処はビスマルクさん達、上空の警戒は秋月達、そして奴らの対処は俺達という感じならいいですか？」

ビスマルク「それなら安心だわ。だけどあなたもまだ経験は浅いんだから無茶しないでね」

リク「はい！」

さてと……。

飛行型海異鬼「ッ!？」

標的をこちらに向けさせるための威嚇射撃は、偶然か13体の内1体に命中する。

他の奴らが仲間を撃ち落されたことに気づき、こちらを向いた。

リク「こつちだ！悪霊共！」

プリンツ「あなた達の相手は私達です！」

潮「ビスマルクさん達は襲わせません！」

飛行型海異鬼「フシヤアアアア!!!」

奴らはそのままこちらに襲い掛かってくる。海異鬼共に俺とプリンツちゃんのコンビネーションを見せるチャンスだ。もちろん、潮もね。

18話 夜の戦場 後編

飛行型海異鬼「フシヤアアアア!!!」

甲高い鳴き声を上げながら、こちらに向かつて高速回転しながら突撃してくる複数の飛行型海異鬼。どうやらそれが基本的な攻撃みたいだが、直線的で避けるのは容易い。

リック「単調だな、そんな攻撃で俺たちを倒せると思うなよ」

プリンツ・潮「お返しです!」

飛行型海異鬼「シユウ……」

すかさず反撃に転じて奴らを撃墜。数は多いものの耐久が脆いおかげで倒すのに苦労はしない。

奴らの攻撃が突進だけなら特に苦戦することもなくあの戦力を撲滅できるのだが、さっきの水中型海異鬼のように口の中に主砲を隠し持っている可能性も0ではないため警戒しておくのに越したことはない。

飛行型海異鬼「カパツ!」

プリンツ「リック君! あいつらが口を開きましたよ!」

潮「見てください!」

リク「あの猪突猛進を助長するような突進攻撃だけじゃなかったか」

奴はカパツと口を開き、そこから砲撃を放ってきた。先ほどの水中型と違い、口そのものが主砲となっていた。形状は嘴型で、普段は旋回しながら突撃することでドリルのような突き攻撃を行い、それが通用しないことが分かると今度は口を開きそこから砲撃を放つという戦法を得意としているようだ。

しかも奴のそれは威嚇射撃だったようで、その直後とある一体が仲間に表示らしきものを出し一箇所に纏まっていたのがバラバラに分散した。奴ら、広範囲にバラけて一斉に砲撃を放つことでこちらを確実に仕留めようとしているっぽいな……。それにしても俺のやっていたことを真似していたあたり学習能力も高いみたいだな。

リク「考えてるなあ……」

プリンツ「腐っても海異鬼ですから、理性も何もないただの脳筋ではありませんからね……」

潮「来ます！」

攻撃準備に入った奴らは一斉に砲撃を放ってきた。これは一箇所に集まっていたらまとめてやられる可能性がある。

リク「二人とも、ここは俺たちもバラけよう」

プリンツ「どういふことですか？」

リク「一箇所に集まっていたら一気にやられる可能性がある。ここは俺たちもバラバラに散るんだ」

プリンツ「回避に専念しつつ攻撃して数を減らすという手もありますが、今はそんなこと考えてる場合ではありませんね」

潮「分かりました！」

二人とも俺の考えに承諾したようだ。奴らの砲撃の嵐を掻い潜りながら俺たちも奴らと同様の戦法をとることにした。

秋月「今のところ上空に敵影は確認できないね」

照月「私たちも他の方の加勢に行こうよ」

秋月「ええ」

秋月達のサイドには今現在、上空において敵影の存在は確認できない。照月の提案で他の面々の加勢に向かおうとしたその時……。

ジャバン

秋月「何!？」

照月「どこからか水しぶきの音が……」

ヒュルルッ

秋月・照月「うわっ！」

突然二人の横を2本の魚雷が通過しそのまま海の中に不時着する。

秋月・照月「な……なんだったんだろう……って」

二人が魚雷が飛んできた方向に振り向くと、そこに1体のヒトデの姿をした水中型海異鬼の姿が……。

照月「あれ……海異鬼でいいよね……？」

秋月「やるしかないね！」

照月「でも空中警戒は？」

秋月「うくん……」

ヒトデ型海異鬼「シャシャア！」

彼女たちがそう考えている間に、ヒトデ型が身体の裏側から無数の魚雷をミサイルの如く射出してきた。

秋月「きゃあ！」

照月「うわ！」

ヒトデ型海異鬼「シャシャア！」

難なくかわすものの、今度は海面に半分浸かり高速回転しながら突っ込んできた。そ

れはまるでカッターのように鋭利な刃となつて海水を切り裂きながら秋月達に襲い掛かつてくる。しかもそれだけに止まらず、回転してくるのと同時に魚雷も放つて来ていた……。

秋月「もう何なの!？」

照月「一方的過ぎるよ!」

その後も敵の猛攻が続く……。

秋月「次から次へと……」

照月「回避に徹してそのままじゃあいつの思う壺だよ! 私たちも攻撃しないと!」

秋月「そ、そうね!」

回転攻撃及び魚雷をかわしながら、標準を動き回りながら猛攻を続けるヒトデ型に合わせて砲撃を放つが……。

ヒトデ型海異鬼「シヤシヤア!」

秋月・照月「砲撃が!」

秋月達の攻撃は、回転中で砲撃を受け付けなかったためなのかそれとも表面の装甲が硬くダメージにならないのかは不明だが通用しなかった。そればかりか二人が被弾してしまふ。

秋月「どう対処すればいいの!？」

照月「表面が硬いなら裏側は弱いはずだよ！」

秋月「それが本当だとしても、あの猛攻を止めない限りは……」

ヒトデ型海異鬼「シィ……」

成す術ないかと思われたが、先ほどの猛攻のせいで疲労したのか敵の動きが止まってしまった……。

照月「動きが止まったよ！」

秋月「あれだけ派手に動き回ってればさすがのあいつでも疲れちゃうわよね……」

照月「でもこれあいつを仕留める大チャンスだよ！」

秋月「確かに……でも……」

ヒトデ型海異鬼「シィー……」

確かに倒すチャンスではあるのだが、ヒトデ型は身体の裏側を海に浸かるようにびったりと海面に張り付いたまま動かないため、倒そうにもそのまま攻撃を当てても無駄となるのだ。なんとかして裏側を攻撃する必要があるのだが……。

秋月「そうだ！」

照月「何かいい方法思いついた!？」

秋月「照月、あいつの周りの海面に連鎖的に砲撃を当ててみて！私をあいつの背後に回るわ！」

照月「分かった！」

秋月は敵の背後に回りこむ。これで準備は万全だ。

秋月「いいわよ！」

照月「それえ！」

ヒトデ型海異鬼「ツ!?!」

姉の指示通りに照月が敵の周囲の海面に砲撃を打ち込んだことで、その拍子に驚いたヒトデ型が起き上がり装甲が薄い裏側を秋月に晒したのだった。

秋月「今だ！えいえーい！」

その隙を突いて秋月が裏側に連撃を叩き込んだことで、ヒトデ型はそれを耐え切れず力尽き沈んでいった。二人の勝利である。

秋月「これが私たち秋月型の力！」

照月「じゃあ他の方の加勢に……」

秋月「皆なら大丈夫！私たちは上空の警戒に専念しましょう！またさつきの奴が現れないとも限らないから周囲の警戒もね！」

照月「そうだね！」

ビスマルク・陽炎型トリオ・浜風・鹿島・浦風「ハア……ハア……」

一方その頃、ビスマルク達はロツカクの群れを全滅寸前まで追い込んでいた。

ビスマルク「最後はあなたよ……」

浦風「もう降参したほうがええぞ……」

ロツカク「ギイ……」

彼女たちは疲れの色を見せ、ロツカクは残り一体となったことで追い詰められ苦渋に満ちた表情をしていた……。

リク・プリンツ・潮「そりゃあ！」

飛行型海異鬼「シユウ……」

なんとか残り1体までは追い詰めたものの、あのバラけてからの連鎖的な砲撃のせいで俺達は結構被弾してしまった……。とはいえ後は奴を仕留めれば終わりだ。

リク「これで最後だ……」

プリンツ「さよならです！」

潮「おとなしく倒されてください！」

俺たちが砲口を奴に向けた次の瞬間……！

飛行型海異鬼「フシヤアアア！」

3人「あつ！」

奴が突然俺たちへ……ではなく、真正面に直進して海の向こうへ飛んで行った……。どこに行くんだあいつ……！

リク「待て！」

プリンツ「リク君！ここは深追い禁物です！」

リク「だけども……！」

潮「そうですね！もしあの個体が直進した先に海異鬼の群れがいたら今の私たちでは返り討ちに会っちゃいます！」

リク「……それもそうだな。だがもしあいつが助けを呼びに行つたとしたら……？このまま放置しておいていいのか……？」

プリンツ「それは……」

潮「確かに放っておくのは危険かもしれませんが、無闇に追いかけて群れと鉢合わせで死んでしまったら元も子もありませんよ」

それも一理あるな……。

リク「分かった。その件については帰還したら考えることにして、一旦皆と合流しよう」

プリンツ・潮「はい！」

深追いは禁物とはよく言ったものだ。この負傷した身で海異鬼の群れに突っ込めばどれほど取り返しのつかないことになるのかは安易に想像できるな。俺も反省しないと。

もう他の皆の戦いは終わってる頃だと思うので、ここは皆と合流することにした。だが一つ気がかりなのは、さつき一体の海異鬼を逃がしてしまった以上、奴が助けを呼んでこちらを撲滅しようと群れを率いてまた現れるかもしれないという事だ。そうなれば今現在の俺たちの状況下での生存確率は限りなく低い……。

それに夢の中の出来事……いや、今は考えないようにしておこう……。

その後、ビスマルクさん達と秋月型の二人と合流した俺たちは一体の海異鬼を逃がしてしまったことを伝える。残り一体となった後にすぐさま止めを刺せばこんなことにはならなかったため俺たちの責任なのだが、皆特に咎める事はしなかった。優しいな……。

まあ、逃がした以上どうしようもないためそう判断しただけかもしれないが……。

一方、鎮守府守護部隊は周辺で警戒を強めていたが、どうやら海異鬼が接近していたのは俺達が迎撃に向かった正面海域だけのようで、現在は艦娘達は鎮守府の中に戻っていたようだ。

出撃から俺たちが帰還し、入渠してから長門さんに報告した後に部屋に戻り眠りにつくまでには特に何事もなく、その後も夜が明けるまでの間、海異鬼が再び襲ってくることはなかった。

そしてその日の深夜……他の艦娘達が寝静まった頃……。

長門「リク達が敵の逃亡を許してしまうとは……」

陸奥「ちよつと面倒なことになったわね」

司令室では、手の甲を顎に当てて複雑な表情を浮かべている長門と、腕を組んで苦虫を潰したような表情の陸奥の姿があった。

長門「あいつの報告から察するに、奴の逃亡先は東方海域だろう」

陸奥「そこって深海棲艦の出没例が少ないいわくつきの海よね……」

長門「正確には、海異鬼の目撃情報が絶えないためか深海棲艦が近づこうとしない海だが」

陸奥「そいつがそこに逃げ込んだって事は……」

長門「……群れ、もしくは親玉がいるってことだ」

陸奥「……」

長門の的を得たその発言に、陸奥は黙り込んでしまった。

長門「明日、早朝に作戦会議を行う。一刻の猶予もない」

陸奥「それらを放っておいたら何をしでかすか分からないものね……」

長門「だから、朝6時になったらアナウンスを流して全員をホール……会議室に集めるんだ！」

陸奥「わ……分かったわ！」

19話 総力戦 前編

真夜中の戦が繰り広げられた日の翌朝、アナウンスによって鎮守府の艦娘達が一堂に会し、これから作戦会議が行われようとしていた……。

リク「迂闊だった……俺たちがあそこで仕留めていればこんな手間をかけさせなかつたんだが」

プリンツ「過ぎてしまった事を今更悔やんでも何も始まりません」

リク「そうだな……」

今回の戦いは今まで以上に厳しくなりそうだ……。何せ奴が逃亡した先に群れがいる可能性が高いからだ。それにゲームのボスマスの如く奴らのボスがいる可能性だけである。そのためこれからの作戦は鎮守府の全ての戦力を投入するだろう。

長門「皆集まったようだな」

と長門さんと陸奥さんがやって来て皆の前に立った。

長門「今回集まってもらったのは、前日の警戒において迎撃に向かった部隊と交戦した一体の海異鬼が逃亡を図り運悪く逃がしてしまった。それでそいつが逃げた先に敵の群れおよび親玉が存在する可能性があり、それを迎撃する作戦を決行したためだ」

彼女がそう告げた瞬間、周囲にどよめき上がる。もちろん、事の顛末を知っている者は冷静だ。無理もないだろう、敵を逃がした上、その先に群れがいるかもしれないのだから。

もちろん、昨日出撃した俺達はそれを知っているため、今更狼狽などしない。

長門「そのため、今回の作戦は全部隊での総出撃となる！諸君らにはこれから東方海域に向かつてもらい、そこで敵の迎撃に向かつてくれ！海異鬼の群れの殲滅作戦を決行する！」

まあ、そうなるな。

長門「では各自準備が出来次第配置につくように！」

一同「はい！」

その後、全員が配置につき出撃の準備が整った。これから前日逃がした個体及びその先にいると思われる群れの迎撃に向かうのだ。さらにボスがいる可能性も視野に入れ、鎮守府にいるほぼ全ての艦娘達の総出撃となる。これはさつき長門さんが説明したな。

リク「こう改めて大勢の部隊が周りにいるとは気合が入ってるなあ……」

プリンツ「総出撃ですからね！」

リク「これは勝ったな！」

ビスマルク「コラ！早々フラグを立てないの！あの先にどれだけの数の敵がいるのか

わからないんだから！」

リク「冗談ですよ……アハハ」

慢心ダメ絶対。

リク「それは置いて、あいつが逃げた方向って東だったよな？」

潮「そうでしたね、これから私たちが向かう東方海域です」

プリンツ「そこは海異鬼の出没率が多すぎて深海棲艦がほとんどいない場所ですね」

ほとんど……ということとは僅かならいるということか……。だが深海棲艦共は奴らに憎悪を抱かれてるんだし、いたとしてもそのまま沈められるか喰われるかしてお陀仏だろう。よってそこでの脅威は奴らに絞られるな。

プリンツ「もうそろそろ出発しますよ皆さん！私の後を着いてきてくださいね！」

そう言つてプリンツちゃんは先頭に出てその場にいる全員を統率し始めた。皆特に疑問を抱くような顔はしていないので鎮守府のリーダー的存在なのだろう。彼女自身も意気揚々と先頭に立ち統率をし始めるあたりリーダーシップが優れている事を窺わせる。

まあ、我らが第一水上打撃部隊の旗艦を務めるだけあるわな。

リク「俺も彼女みたいになりたいな……」

陽炎「リク？置いていくわよー？」

リク「今行く」

まあ、そんな事を今頃抱いたところで気持ち悪いだけだな。俺は彼女に憧れるのではなく、彼女を守るナイトになりたいのだから……ってこれも気持ち悪いか。

しばらく進んだ頃だろうか……やがて一帯の空に暗雲が立ち込め始めた。

リク「な……なんだ!?!」

プリンツ「昨日は夜だったから判りづらかったですけど、海異鬼が出没するテリトリーの空はまるで嵐が巻き起こるかのような雲に覆われるんです」

リク「てことは……」

プリンツ「近いです!」

奴らの縄張りに突入したということか……。心なしか四方から視線を感じる……。

とその時……。

ヒュルル

何かが発射されたような音が聞こえてくると共に俺たちの目の前でそれが着弾し、その衝撃で引き起こされた水しぶきに視界を奪われてしまう。

リク「砲撃!?!」

プリンツ「あそこの空……から放たれたってことは……」

黒潮「見てや！」

黒潮の言うとおりに空を見上げると、暗雲から赤い目を光らせた無数の飛行型海異鬼の姿があった。やっぱり長門さんの見立ては正しかったのだ。あちらも殺る気みたいだ。

浜風「何よあの数……」

秋月「何体いるの!？」

照月「ひいふうみい……」

数は低く見積もっても1000体ほどはいそうだぞ……。

鹿島「あれを全滅させるのは厳しいかしら……」

浦風「何を今更弱音を吐いておるんじや……」

赤城「もう後戻りなど出来ません。例え敵がどれほどの群れを成そうが、私達のやることはただ一つです」

加賀「覚悟を決めるのです、皆優秀な子達ですから絶対任務をやり遂げられます。新人のあなたを含めて……ね」

リク「は……はい！」

なんか期待されちゃうとやりづらいな……。だが俺だつてこの世界に来た以上は戦い抜く覚悟だぜ。

リク「行くぞ皆！暁の水平線に勝利を刻むぞ！」

プリンツ「ちよっとそれ私の台詞ですよ!？」

さあ、開戦だ！

赤城「まずは先制攻撃で敵の数を減らしましょう！」

加賀「空母機動部隊、行きます」

蒼龍「敵は上空、艦載機……」

飛龍「発進！」

上空の群れ目掛けて、空母機動部隊の4人が戦闘攻撃機を発射する。それは複数の海異鬼を打ち沈める事に成功した。

プリンツ「各部隊！4人に続いてください！分かっているとありますがあの海異鬼は低空飛行になった時に砲撃しないとうまく撃墜できないですよ！」

空母が用いる艦載機による攻撃はその性質上敵が遠くにいても威力が落ちることなく倒せるが、通常の砲撃だと敵の距離が離れすぎている場合、威力がガタ落ちしてしまうく倒せなくなるのだ。

よって奴らが低い位置に移動したのを見計らって倒すというわけだな。

リク「燃えてきたア!!」

陽炎「リク！あまり敵陣の真ん中に突っ込まないようにね！」

リク「分かつてるって！」

ただでさえ実戦経験に乏しい俺が敵のど真ん中に突っ込んだらどうなるのかなんてお察しだぜ……。適度に奴らに接近して、打ち落とす！

リク「かかつてこいや悪霊共！」

敵軍「フシヤアアア!!」

ちよろいな。適当に挑発してやっただけで、奴ら血相を変えてこつちに突っ込んできやがった。どうも敵共は直情的らしい。少なくともあの飛行型海意鬼共は……の話だ
が。

リク「撃つ！」

まずもつとも接近した敵を撃墜し、今度は右、その次は左、真ん中、再び左、次に右、真ん中と言う感じで敵を次々と打ち沈めていく。

プリンツ「リク君すごいです！」

黒潮「安定の撃破率の高さやなあ」

不知火「私のご指導ご鞭撻のおかげですな」

陽炎「あんた何もやってないわよね……」

潮「私も頑張らないと……」

浜風「はいはい無駄話をしない」

鹿島「次来ますよ！」

奴らは直情的つぼいが、自分が不利と見ると逃げるもとい撤退していく位の知能はあるようだからな。隙を見せたらそこを付け込まれるかもしれない。それに攻撃手段は例の突進だけじゃなく口の中にある主砲による遠距離攻撃もあるから、一斉にそれに切り替えられたらちよつと厳しくなるかな。

まあ、その際は空母の皆さんに任せればいいけど。

秋月「発射します！」

照月「ガンガン撃てえ！」

島風「おっそーい！」

朝潮「出て行け！この海域から！」

夕立「これがソロモンの悪夢よ！」

時雨「残念だったね。君達の単純さには失望したよ」

浜風「沈みなさい！」

鹿島「許しません！」

陽炎「砲撃よ！てやあ！」

黒潮「そんな速度じゃうちらは倒せへんでえ！」

不知火「はあ！」

浦風「おんどりやあ！」

潮「沈んでください！」

磯風「なめないでもらおうか！」

谷風「とりやあ！」

リク「次々！」

プリンツ「フォーイヤー！」

ビスマルク「ファイヤー！」

その後は全員の頑張りで順調に敵の数を減らして行き、650体くらいまで減らしていったのだが……。

磯風「それにしても、ボスらしき奴の姿が全く見えないな」

谷風「どうせ気づかれない位置で静観していて御山の大将で満足してるんじゃないの

「？」

二人の指摘通り、上空周囲を一瞥してみてもボス海異鬼の姿が見当たらない。これだけ無数の海異鬼がまるで黒い絨毯が敷かれているかのよう空に群れているのだから、どこかに奴らを指揮していると思いきボスがいても不思議ではないはず。

リク「まあ、出なかつたら出なかつたでこいつらを全滅させればそれでよしだ」

磯風「端からそのつもりだ！」

谷風「それが理想！」

もしかしてボスは奇襲を仕掛けるため海中に潜んでそこから砲撃を放って俺たちを一網打尽にする気なのでは？と最悪な方向に考えてしまったが、んなわけないよな……。俺っていつも最悪な方向に考えてしまう性質なんだよな……マイナス思考っていうか。

敵軍「……」

プリンツ「皆さん！飛行型海異鬼が砲撃体勢に入りました！」

一同「ツ！」

不幸か、確実に追い詰められつつある海異鬼共が遠距離攻撃に移り出す。あんな数で一斉に砲撃されたら……。

プリンツ「避けてください！回避準備を！」

浜風「でも避けきれないと思うけど!？」

プリンツ「いいから!」

リク「このまま奴らの遠距離攻撃の餌食になるか、それとも多少の被弾は諦めて回避に専念して少しでも被害を減らすかどっちがいい?」

浜風「それは……」

ここは戦場、いつどこで死者が出てても不思議ではない。ましてやこのような状況下で無傷でやり過ごせる程甘くはないのだ。まだ戦闘経験が乏しい俺が言うのもなんだがな。

プリンツ「リク君の言うとおりです!」

敵軍「カパッ」

リク「ほらほら、敵さんはいつまでも待ってはくれないぞ!」

浜風「分かった!」

赤城「待って!」

回避しようとする俺たちだが、その直後に赤城さんの声が俺たちを遮る。

リク「赤城さん!?!」

赤城「ここは私たち空母機動部隊に任せてもらえない?」

リク「早くしないと攻撃が飛んできますよ!?!」

赤城「大丈夫、ね？」

加賀・二航戦「はい」

まるで俺達を制止しようとしてる様な止め方だったな……。

リク「大丈夫かなあ……」

プリンツ「あの4人なら大丈夫だと思いますが……」

ビスマルク「彼女たちの本気はあんなものじゃないわよ」

では拝見させてもらおう。空母機動部隊の皆さんの本気を。

一航戦・二航戦「では、行きます！」

敵軍「ッ!？」

彼女たちの放った爆撃機によって攻撃に転じようとした飛行型海異鬼を計630体もの数を仕留める事に成功、撃墜されなかった方の奴らも多くの仲間達を一瞬で喪失したためか驚愕して攻撃をやめてしまった。

リク「すげえ……瞬く間に数を減らしやがった……」

ビスマルク「ね？言ったでしょ？」

リク「あれ敵の本拠地に投下すれば戦い終わるんじゃないやね？」

プリンツ「思考が単調すぎます……」

んなわけねえか。それだけで終わったら最早苦勞はしない。

陽炎「何はともあれ、これで敵戦力を大きく減らしたわ！」

黒潮「はよ終わらせるでー！」

海戦直後は1000体もいた海異鬼の軍勢も、残るは20体を残すのみとなった。後
はあいつらを全滅させれば……。

時雨「皆！一気にしとめるよ！」

夕立「ソロモンの悪夢、見せてあげるっほい！」

「ガアアア……」

潮「待ってください！」

とここで潮が二人を遮るように声を上げた。

陽炎「どうしたの？もう敵は残り少ないのに……」

潮「どこかから甲高い鳴き声が聞こえてきた気がします」

浦風「聞こえてこなかったぞ？」

潮「……気のせいかなあ」

「ガアアア……」

いや、気のせいなんかじゃない。確かに前方から微かに生物の咆哮らしきものが聞こえてきている。少なくとも俺の耳にそれは聞こえた。

リク「警戒はしといたほうがいいぞ」

浜風「リクまで何を言ってる……」

プリンツ「……皆さん、まだ帰還するには早いようです」

鹿島「どういうこと？」

プリンツ「どうやら……先ほどの海異鬼の親玉があそこに居るみたいです！」

一同「ッ!？」

プリンツちゃんのその言葉により、全員一斉に前方の上空を見上げた。

??「ガアアア……」

磯風「あれは……!？」

プリンツ「飛行型海異鬼の親玉、ヴァルチャーです！」

リク「で……でけえ……」

そこに居たのは、俺達が先ほどまで対峙していた飛行型海異鬼の親玉であろう巨大飛行型海異鬼だった。そのヴァルチャーと呼ばれる個体は大型帆船が怪物化したような姿をしており、マストと帆のような翼を生やし胴体から二つの錨をぶら下げ、頭頂部に船首旗らしき物を付けている。その大きさは左右の奴らの約5倍はありそうなデカさで、見るものを圧倒させる。脚は存在せず、さらに両翼の中心部分に大口徑主砲らしきものが存在しているなど、さながら空を翔る空中戦艦のようだ。

プリンツ「当然先ほどの海異鬼とは強さが段違いです！」

リク「……倒せるのか？あんなデカブツ……」

プリンツ「やるしかないです！それにあんなのを放っておいたら大変なことに……」
ビスマルク「それ以上に市民が暮らす市街地に侵入でもしたら……」

間違はなく多くの死人が出るな……。それどころか街が壊滅する恐れも……。

リク「なんとしてでもここで仕留めなければならぬ……」

不知火「そうですね……！」

陽炎「ただでさえ深海棲艦の脅威にさらされてるのに、さらにこんな奴がのさばっているなんてほんとこの世界がいつ滅びるか分かったもんじゃない……」

浦風「まったくじゃない……」

プリンツ「行きますよ皆さん！彼を倒すのです！」

早くも、この世界の情勢が分かった気がする……。深海棲艦のみならず、こんな奴まで跋扈してるなんてハードにもほどがあるぜ……。

20話 総力戦 中編

いよいよその姿を現した巨大飛行型海異鬼「ヴァルチャー」。

明らかなデカブツで倒せるかどうかは怪しく、手下共の放つ砲撃すらもに当たれば一発で中破する可能性が高いというのに、さらにそのボスであるあいつが放つ砲撃の破壊力など想像するだけでも恐怖で身が縮んでしまう。だがそれでも俺達は奴を倒さなければならぬ。この世界を救う勇者の名に掛けて。

リク「プリンツちゃん、あいつは真正面から立ち向かって勝てる相手か？」

プリンツ「ただ闇雲に突っ込んでしまえば間違いなく返り討ちに会います。だから精密な戦法を用いないと……」

リク「だよな……」

奴は空高く飛翔していてそのまま砲撃しても大したダメージは与えられないはず。配下の奴らみたいに低空飛行になったところに砲弾をぶっ放したいわけだが……。

ヴァルチャー「ガアアア……!!」

飛行海異鬼「フシヤアアアア!!!」

奴は子分に指示らしきものを出し、こちらに襲わせた。

陽炎「来るわ！」

黒潮「砲撃やで！」

不知火「沈め！」

すかさずトリオが子分を撃墜しようと砲撃を放つが……。

飛行海異鬼「フシヤアアアア!!!」

なんと攻撃を容易くかわした後、砲撃しながら突撃するという今までに見せなかった挙動を起こし、トリオが避けようとするも……。

トリオ「ぐっ！」

明らかにスピードの増した状態で放たれ勢いに乗ったその砲撃を避けきることが出来ず被弾してしまう。

リク「あいつら早くなってねえか!？」

プリンツ「ボスが指示を出したせいか子分たちの動きが俊敏になってます！」

これが奴らの本気というわけか……。ボスがいることで張り切りだしやがった……。いいところを見せようとしているんだなあいつら……。生意気すぎる!!!

リク「3人とも！大丈夫か!？」

陽炎「別になんてことないわ！」

黒潮「ちよつとかすつただけや！」

不知火「お気になさらず！」

さすが戦い慣れてるだけはある……。3人ともダメージを負っても意にも介してないようだった。多少のダメージなどこ吹く風の様子。数多くの戦いを乗り越えた身ならばあれくらいどうという事はないということか。

リク「早く周りの雑魚を仕留めないと戦況が苦しくなるぞ……」

プリンツ「ですね……」

ビスマルク「リク君！プリンツ！危ない！」

リク・プリンツ「ッ!？」

飛行海異鬼「フシヤアアアア!!」

ビスマルクさんの声とともに後ろを振り返ると、そこに不意を突いた海異鬼が俺たちの背後にいたのだ！いつの間に背後を取ったんだ!?やはり動きが俊敏になっている影響だというのか……。

リク・プリンツ「……!!」

潮「危ない！」

飛行海異鬼「フシヤア……」

不意を突かれ零距离から攻撃を食らいそうになった俺達だったが、間一髪それに気づいた潮の砲撃が敵を沈め事なきを得た。

潮「大丈夫ですか？」

プリンツ「問題ないです」

リク「ありがとう」

潮「いえいえ」

危ねえ危ねえ……。ちよつとでも遅れたら被弾していたところだったぜ……。あの時の教訓がまったく生かせてない事に、俺は恥ずかしくて恥ずかしくてたまらなかつた。こんなんじやこの世界を救う勇者として示しがかねえよ……。

潮「二人とも、自分の海異鬼はボスがいる影響で勢いを上げてスピードが増しています。おそらくそのまま動きを捉えることは厳しいでしょう」

やっぱりな……。

リク「じゃあどうすれば……」

潮「あのボスを倒すしかありません」

ボスを失えば群れの求心力が低下し、奴らの勢いが弱まるってことか。それならやることは一つしかない。

潮「それに、彼は普段は子分に戦いを任せ、敵が自分に近づいてきた場合にのみ攻撃してくるようです」

プリンツ「ってことは？」

潮「彼に接近して叩くという戦法が有利と思われませう」

リク「なるほどな」

「ただ子分共のスピードが速くなっている以上、あいつとの戦いに専念するつてのはちよつと厳しくないか？ 仮に近づいたことが出来たとしても、子分共に邪魔されるのがオチだと思うが……。」

リク「でも子分は……」

プリンツ「いえ、配下は皆に任せてボスを私とリク君で相手にすればちよつどいいじゃないですか！」

リク「う……うむ……」

潮「私たちのことは心配いりません。もし子分がリクさん達に襲いかかろうとしても私達が何とか食い止めて見せます。だから安心してください」

リク「わ……分かった……」

「他の皆で周囲の雑魚を任せ、俺とプリンツちゃんで大將を倒す……。これ結構完璧な流れなんじゃないか？ ヒロインと共に敵の総大將を倒すというどこか王道な気がする展開やな……。」

潮「では、ご武運を!!!」

リク・プリンツ「おう！（はい！）」

彼女は俺達の安全を信じ、他の皆に襲い掛かっている最中の海異鬼の元に向かつて行った。

俺達も子分に戦いを任せ踏ん返り返っているボスの迎撃に向かうとするか。

リク「俺達も行こうか」

プリンツ「はい！」

奴は相変わらず高いところを飛翔しており、こちらが自分の元に向かおうとしていることに感づいていないようだ。ふざけた奴だぜ。自分は戦わなくせに子分共には偉そうに命令する。

……あれ？これ俺が言えたことじゃないよな。だって俺もここに来る前は自室に引きこもって……なんてそんなことは今はどうでもいい。戦場に私情を挟んでいる暇はない。

ヴァルチャー「ガアアア……」

リク「あの野郎余裕だな……」

プリンツ「手下に任せれば自分は戦わなくていいっていう魂胆なんですよね」

リク「だがその余裕もここまでだ」

プリンツ「ですね！」

あちらから来ないのならこちらから近づくまで！先手必勝だ！

飛行型海異鬼「フシヤアアアアアア！」

リク「邪魔だ！」

プリンツ「そこをどいてください！」

飛行海異鬼達「フシヤア……」

ボスに近づかせまいとこちらに向かつて遠距離攻撃を放ってくる海異鬼達だが、難なく避け即座に反撃して仕留めていく。お前達の攻撃なんざもう見切ったつてんだよ！

ヴァルチャー「ガアアア……！」

やがて自分目掛けて接近してくる俺達に気づいたのか、こちらに標準をあわせた奴は攻撃態勢に入った。お前の静観の時間はここまでだ！

ヴァルチャー「ガアアア!!!」

バン

大きな轟音とともに翼の主砲から放たれた砲撃は、子分共の物よりも桁違いのスピードでこちらに向かつてくる。あんなのまともに食らったらワンパンでやられるだろう。もはや戦艦すらも一撃で轟沈してしまいそうだ。

ザバン

リク・プリンツ「うわっ！」

何とか避けるものの、海に着弾した時の衝撃でバランスを崩しそうになってしまう。

ヴァルチャー「ガシャアアア!!!」

絶え間なく次々と攻撃してくる大型飛行海異鬼ヴァルチャー。普段はじっくりと静観していてやる気が微塵も感じられないが、いざやる気を出すところも攻撃が激しいとは。さすがはボス海異鬼と言ったところか。

さて、こちらも攻撃を加えたいところだが、おあいにく相手は相変わらず空高く飛び上がっていてこちらの攻撃は届きそうもない。低空飛行になるタイミングを狙いたいところではあるが、どうもあの位置をピツタリと維持していて一向になる気配がない。

リク「どうしたものか……」

そう考えてるうちにも、奴の攻撃は激しくなるばかり。そればかりか、口から子分を召喚し始めたのだ。

リク「何だあいつ……」

プリンツ「どうやら体内に手下を収納しているみたいですね……」

奴を今ここで倒さなければ戦況が苦しくなるのは目に見えている。向こうでは今皆が子分共の相手をしているため、召喚された子分を仕留め損ねあちら側に行かれてしまつてはめんどくさい事になる。ただでさえスピードが増して目視できるのにも疲れるのに、数の暴力にまで発展すればいよいよ手がつけられなくなってしまう。一刻も早く攻略法を見つけねば……。

リク「どうすればいいんだ!？」

プリンツ「低空飛行になつてくれないとなると……ちまちまと遠距離で攻撃するしかないです……」

んなもんものすごく時間がかかるじゃないか!今何時かは分からないが、このまま長引けば奴を追い詰めた頃には日が落ち始めて疲労困憊に陥ってしまう。

飛行海異鬼「フシヤアアアア!!」

その時、対抗策を考え中の俺達を見て勝利を確信したのか、子分共がグンタイアリの如く隊列を組んでこちらに突撃してきたのだ。一気に決着つけるつもりのようなのだ。

プリンツ「まずいですね!」

リク「……こうなったら」

ふとここでいい案を思いついてしまった。

プリンツ「リク君……?」

リク「奴が低空飛行にならないなら……こちらか近づくまでだ!」

プリンツ「でもどうやって……あっ!」

リク「そうだ……あいつらを足場にするんだ!」

正直、奴らに飛び乗れるかどうかは賭けだ。もし失敗して海面に着地し、バランスを崩した所をボスに狙われたらそのままお陀仏もありうる。だが善は急げだ。失敗した

らその時に考えればいい!

リク「準備はいいな!」

プリンツ「はい!」

いつせーの……。

リク・プリンツ「とおりやあああああ!!!」

腹から大きく声を発しながら、こちらに突撃してくる子分共に飛び移った。

飛行海異鬼「ツ!」

子分共は想定外の行動を起こされたためか、組んでいた隊列を崩してしまった。それどころか進路を皆がいる方向からボスの方向に変更してしまった。

ヴァルチャー「ガアアツ!」

さすがのボスもこれは予想外のように、まるで俺の言う事を聞けと言わんばかりに子分に向けて砲撃を放ってきた。これが反面教師というものか。これは一気に畳み掛けるチャンスかもしれないな。

リク「ついてこれるか?」

プリンツ「もちろんですよ!私はあるあなたと共に敵を倒すんですから!」

リク「じゃあしつかりついてこい!」

プリンツ「はい!あとそれ私の台詞ですからね!」

あはは。なんか知らんが言ってみたかったんだ！俺ってかっこいい！

……今のは聞かなかった事にしてくれ。

プリンツ「こんなこと思いつくなんて私達って……」

リク「いいコンビだな！」

子分共を足場にジグザグに乗り移りながら、ボスのいる方向へと向かっていく。奴は相変わらず自分の部下に向けて攻撃をぶっ放しており、子分共も想定外の事が重なり呆然としているようだった。

悪いな、ちよつとばかりしお前達を利用してもらうぜ。

リク「この距離なら……!!!」

プリンツ「彼に決定打を与えれそうですね!!!」

奴との距離約数メートル……覚悟しろデカブツ!!!

ヴァルチャー「ガアアア!!!」

リク「まずは……」

あの強力無比の砲撃を真っ先に潰し、奴の攻撃手段を潰す!!!

それが成功したら次は一箇所に集中的に攻撃を当ててダメージを蓄積させていく!!!

ヴァルチャー「ガアアア!!!」

リク「食らえ!!!」

プリンツ「ファイヤー!!!」

俺達の狙いはお前の主砲!!!それを潰せばお前は砲撃できなくなる!!!

ヴァルチャー「ガア……!?!」

狙い通りだ!主砲を破壊したぞ!俺が右、プリンツちゃんが左の砲を破壊した!

次は脆そうなところを重点的に狙う!

リク「どこが脆いか分かるか?」

プリンツ「胴体、頭部は頑丈でしょうね」

リク「……待てよ?俺達は低空飛行をしないあいつに近づくために子分共を足場にするとこの作戦に出たはずだ」

プリンツ「ええ」

リク「それなら翼を攻撃して、奴を強制的に低空飛行にすればいい!!!」

プリンツ「なるほど!リク君頭いい!!!」

……冷静に考えれば誰でも思いつくよなこれ。

ヴァルチャー「ガアアア……!!!」

リク・プリンツ「ツ!?!」

火炎放射!?!こいつもまた別の攻撃を持っていたのか!

リク「この野郎!抵抗する気か!?!」

プリンツ「往生際が悪いですよ!!」

不用意に近づけば丸焼きにされちまう……。だが近づかねば倒せやしない!

リク「この野郎!おとなしく攻撃を受けやがれ!!!」

ヴァルチャー「ガアアア!!!」

プリンツ「リク君!!!」

リク「クソツ……!!!」

空中では避けきれねえか……!!!右肩を負傷してしまった……。

プリンツ「リク君に何するんですか!!!」

ポオオン!ポオオオン!!ポオオオオン!!!

どうやらプリンツちゃんがキレたみたいだな……。怒涛の三連撃であのデカブツの

左翼を破壊したみたいだ……。

ヴァルチャー「ガアアアアツツ……」

奴は片方の翼が潰れた事によってバランスを崩し、落下していった……。

プリンツ「大丈夫ですか!」

リク「あ……ああ……」

こんなの今までに経験した事のない痛みだぞ……。まるで皮膚が焼け焦げて落ちていくような激痛……。よく漫画やラノベとかで敵の攻撃を食らって痛みに悶えるキャ

リク・プリンツ「ツ!？」

飛行海異鬼「フシヤアアアアア!!!」

なんと、倒されたボスの中から、実に1000は超えるであろう無数の海異鬼共が飛び出してきたのだ!

陽炎「動きが遅くなった!」

黒潮「リクはんたちがやってくれたんやな!!」

不知火「これなら倒せます!!」

ビスマルク「ボスが死ねばもうこちらのものよ!皆!一斉掃射!!!」

一同「はい!!!」

バアン!バアアン!!バアアアン!!!バアアアアン!!!!

ビスマルク「ふう……」

浦風「これで雑魚も一掃したな」

浜風「あとはリク達が戻ってくるのを待つだけ……」

フシヤアアアアアアア!!!

一同「ツ!?!」

磯風「なんだ!?!」

リク達のいた方角から、1000体もの飛行海異鬼の軍勢がこちらに向かって接近していった……。

鹿島「なんですかあの数！」

時雨「そんな！リク達がボスを倒したはずだよ！」

秋月「まさか増援!？」

プリンツ「おーい！」

ビスマルク「プリンツ！リク！」

陽炎「リク！どうしたのよその傷！」

リク「話は後だ……そんなことよりも……」

飛行海異鬼の軍勢「フシャアアアアア!!」

リク「ボスは討伐した……だがその際に奴の中から……」

黒潮「なんやて!？」

リク「肩の傷の事は後で話す……今はこいつらをどうにかするのが先決だ……!」

不知火「ですがこの数相手では……」

ビスマルク「……やるしかないわ。私達の任務はこの海域で敵を全滅させる事よ」

プリンツ「その通りです！皆さん！」

潮「もう一押しです！頑張りましょう！」

一同「おお!!!」

これは総力戦、逃げるわけにはいかない。潮が鼓舞したことで皆もやる気だ。何、ボス
を倒したんだから動きは鈍くなっているはず、やるしかない!

21話 総力戦 後編

ボス海異鬼を倒しこれで終わりかと思われた矢先、奴の中から無数の子分共が現れそいつらを駆逐する羽目になった俺達。

しかも皆あいつらの動きに翻弄されて疲労が蓄積されているはずだ。よもや俺達なんてボスとも対峙していたためもうクタクタだ。ゲームで言うところの赤疲労的な感じだな。そうなると命中率回避率共に著しく低下し、本来ならばまともな戦闘は出来なはず。それでも俺達はこの状況に置かれてもなお戦い続けている。それはもはや、この世界を守るためだ。こんな奴らを放置し、仕舞いには市街地に向かわれては人々に及ぶ被害も甚大だ。だから決して止まるわけには行かないのだ。

島風「何体減った？」

朝潮「まだ20もないわ……」

赤城「数は多いですが、こつちだつて総力を投入しているのです！」

時雨「負けるわけには行かないね」

夕立「ぼーい！」

飛行海異鬼「フシャアアアアアア!!!」

Bannon!

加賀「……頭にきました」

ヒュン! ガシヤア!

飛行海異鬼「フシヤア……」

秋月「怖いよお……」

照月「敵が?」

秋月「加賀さんに決まってんでしょ!」

飛行海異鬼「フシヤアアアアアア!!!」

秋月・照月「あ……」

ヒュン! ガシヤア!

飛行海異鬼「フシヤア……」

加賀「そこ、無駄話しない」

秋月・照月「すみません!」

飛龍「ただでさえ数が多いんだから意識を敵に集中しないとね!」

秋月・照月「は……はい!」

飛行海異鬼達「フシヤアアアア!!!」

蒼龍「もう! 次から次へと!」

あいつらボスが倒されたってのに勢いが止まらねえな！それともボスの仇を取るべく本気を？単純に上司思いなのか、それとも頭のネジが外れていかれちまつてるのか？どっちにしるぶつ潰すだけだ。

プリンツ「私の部隊の皆さん！背中だけは守りましょう！」

リク「どういう意味だ？」

プリンツ「敵に背後を取られないようにってことです！」

リク「ああ理解理解」

飛行海異鬼の軍勢「フシヤアアアアアア!!!」

ビスマルク「集まってきたわね……」

黒潮「正直……かなりしんどいでえ……」

陽炎「これほどの大部隊でありながら……まさか目にも留まらない速さでこつちを翻弄し始めた数匹の子分に苦戦するとはね……」

不知火「ボスが自分を鼓舞するなんて事態想定していませんからね……戦場では何が起こるのが分かりません……」

浦風「ほんとじゃな……」

多勢に無勢……たかが数匹程度に多勢が苦戦するなんて聞いた事ないぞ。ちよこまかと動かれるだけでこうも戦況が変わるとは……。よくバトル漫画でたった一人の主

子分共が次々と撃墜されていく……。これならあいつらを殲滅できる……。いや、こんなところで慢心したら負けだ。鎮守府に帰還するまでは決して油断してはならない。アニメ艦これでも……。いやなんでもない。

プリンツ「もう一息ですよ皆さん！」

リク「暁の水平線に勝利を刻むぜ!!!」

一同「オー!!!」

その後、疲労が蓄積しながらも俺達は子分共を全滅させる事が出来た。一応、敵の生き残りがいるかもしれないので念のため数分ほど周囲を警戒していたが、特に何事もなく作戦は終了した。

……本当に特に何事もなかったんだよ？慢心とかそういう問題じゃなく。

さて、鎮守府に帰還した後の事を説明すると、皆そこそこ被弾していたため、入渠施設が一時期満員になるほどに埋まった。バケツの数量に関しては200個くらいあったため満員になったも待ちぼうけを食らうことはなかった。皆の傷に関しては上記の通りだが、俺はというと、ボスの攻撃を右肩にモロに食らったためかなりダメージが大きかった。まあ、バケツをぶつ掛けられたためすぐに完治したのだが。バケツの力つて

すげえ！（一応説明しておくけどバケツというものは高速修復材というアイテムだぞ）
……とここで俺はある疑問を抱く。海異鬼は俺達が使うような対深海棲艦用の攻撃手段を持っているんだ？単純な答えを出せるなら、奴らは深海棲艦に激しい憎悪を抱いているため、それに同調するかのように備わっていたとか？どちらにしろ、奴らが俺達にとつて強敵である事には変わらない。

そんなこんなで、俺は深海棲艦と海異鬼という二大勢力との戦いの過酷さに気づいたわけだが、どつちがづらいかって言えばまあ、後者だな。前者も厄介っちゃあ厄介だが、後者は今回のようにボスがいることで子分共のスピードが尋常じゃなくらい増していた。それに比べて前者はボス……というよりは旗艦的な存在が指示を出したとしても速さにはそれほど差はない。単純な強さもあるが、スピードが増してちよこまかと動き回られてこちらの攻撃が当てられず次第に疲労が溜まっていくという点も見逃せない。だから俺がづらいと感じるのは後者という事だ（誰も聞いてない？自問自答です）
さてと……入渠も終わった事だし、夕食の時間まで自主練でもしますかね。今度は一人じゃなくていつものメンバーと一緒にね。

加藤リク

年齢 秘密☆

身長 何それおいしいの？

体重 何それ（ry

好きなもの 艦これ、二次元美少女

概要

元引きこもりの青年。大学受験で躓き、進路が決まらなかったため高校を卒業後引きこもりの生活を送っていた。艦これが好きで、部屋に引きこもっていて退屈だったところ何気なく始めてそれ以降ハマってしまった。何隻かはカンストしているがケツコン艦はいない。引きこもり期間中はコンビニ以外あまり外出しなかったためか、髪の毛が伸び放題である。また趣味の事に関しては大抵amazonに頼っている。

そんな生活を送っていたある日、昼食を買いに外出した際に車に轢かれそうになった老人を救った結果、自分が変わりに轢かれて亡くなるというあっけない最期を遂げた。

死後、紆余曲折あってプリンツという美少女に何やら事情が異なる艦これの世界に連れて行かれ、そこで第二の人生を歩む事になり、さらにそこで個性豊かな美少女達と共に深海棲艦と海異鬼の戦いに巻き込まれる。

第3章 活発化する二大勢力編

2 2 話 信頼

リク「くたばれ！」

総力戦から10日後、俺たちは深海棲艦との戦いといういつもの日課をこなしていた。対峙していた軽空母又級率いる敵機動部隊を仕留め終わったため、これから鎮守府に帰還する所だ。

プリンツ「今回の任務は終わりですね」

リク「なかなか歯ごたえがあったな」

ビスマルク「まあ、所詮は無印の軽空母だからそんなに脅威ではないわ」

リク「海異鬼共と比べたら紙装甲だから楽だな」

陽炎「一般人にとっては脅威なんだけどねー」

そうだよな。俺も最初の頃は苦戦していたけど、今なら慣れてきた分楽だな。まあ、これまで対峙してきたのは重巡までの中級までだから、戦艦勢が出てきた場合苦戦は必死だろうが。一度だけその戦艦とにらみ合った事はあるが、あの時はあくまで邂逅しただけに過ぎない。感想としてはこれまでの奴らとは一線を画していたなほんと。

黒潮「リクはんは戦艦級と対峙したことがないからそんな事が言えるんやで」
不知火「今のあなたはまさに井の中の蛙ですね」

リク「分かてるよ……」

プリンツ「あはは……」

冷静に突っ込まれた……。今まさにそう考えていた事なのに予想通り突っ込まれたぜ……。でもプリンツちゃんとの関係プレイであの大型飛行海異鬼を倒したんだから大丈夫だとは思うけどな。

あつ、今慢心だろと思つた人は正直に手を挙げなさい。

とまあそうこうしてるうちに鎮守府に帰還し、食堂に向かつて昼食を取る。今日のメニューはカツ丼だ。やっぱり出撃から帰還した後の飯は格別にうまい。

その後、いつものように修行を始めた。まだ見ぬ強敵を相手にするのに、練度を上げるのは重要事項だ。命中精度も、反射反応速度も鍛えるため、さまざまな艦娘相手に演習も行う予定だ。

どうも、以前の総力戦以降、二大勢力の動きが活発になつていゝらしく、両者が争つてゐる事も頻繁にあるという話を大淀さんから聞いた事がある。どつちから喧嘩を

ふっかけているのかは分からないが、十中八九海異鬼の方だろう。まあ深海勢を恨んでるのだから当然といえば当然か。海異鬼勢からすれば恨みを晴らすために深海勢に攻め入っているのだろうが、それによって周囲の海域が汚染されるため他の人たちからすればいい迷惑だ。海域が汚染されれば航路が遮断されて船乗りにとっては死活問題になりうるからな。演習の件もそのためだ。

もはや、そのための艦娘ってわけだな。

演習後……庭園にて俺達は息抜きをすることにした。

リク「相変わらずこの景色は綺麗だな……」

プリンツ「二大勢力との戦いの過酷さも忘れちゃうそうなくらい綺麗ですわね♪」

静かな波の音が、俺達を癒してくれるかのようだ。いつも戦いなどで身も心も疲れ果てた者達はこの砂浜で波の音を聞きながら景色を眺めてるか、花畑でゆつくりと疲れを癒す事がほとんどだ。今、ここには他の子達の姿は見当たらない。陽炎達もなぜか着いてこなかった。

リク「なんで陽炎達は一緒に着いてこなかったんだ？」

プリンツ「うーん……」

ここ最近、俺達の部屋にはいつものメンバーだけじゃなく秋月や照月、時雨や夕立とも頻繁に部屋に遊びに来るんだ。だから二人つきりである事は意外にも少ない。先

輩のような存在のビスマルクさんや空母勢も時々やってくる。まさかあいつら、俺とプリンツちゃんか二人つきりになれるように気遣ったのか？

プリンツ「なんだか、デートしている気分ですわね♪」

リク「そ……そうだな……」

これまで前世で生きてきた人生の中で、女子とデートなんてする機会なんてなかった。いやまああるほうがおかしいのだが。小学生時代に女子と会話したりとかした事はあるが、それも中学生以降はまったく女子との縁はなかった。

リク「なあ……」

プリンツ「はい？なんでしょう？」

リク「プリンツちゃんは俺の事どう思ってるんだ……？」

プリンツ「ほえ？」

リク「俺の事を優しいとかいろいろ言ってくれたよな……？」

プリンツ「はい」

リク「大学受験に躓いたからってその後の進路を諦めて引きこもり生活を送っていた俺のこと……どう思う……？しょうもないだろ……？」

プリンツ「……」

ふとここで引きこもる経由を話してしまった。これは内緒にしておくつもりだった

のに。

プリンツ「あなたは元々死ぬ予定だった老人を助けて変わりに自分が命を落とすことになりました。しかもあなたにとってその人は赤の他人でその人がどうなるうが関係なかったはずです。それなのにああいう行動をするのってよっほどの勇気がなければ出来ないです」

リク「それは……ただ……」

んなもん俺にも分からないよ。俺はただ……。

リク「自分の目の前で他人が死ぬ姿なんて見たくなかった。それに昼食を食べる前にそんな光景を目の当たりにしたら飯がまずくなると思っただけだ……」

プリンツ「……」

リク「ようは自分のためだ。俺が不快な思いをしたくなかったってだけで……」

プリンツ「でも実際に助けたんですよね？」

リク「助けたっつか、歩道に突き飛ばしただけだ……」

プリンツ「あなたはその人の命を救ったんですよ？それがそんなに不名誉なことなんですか？」

リク「うっ……」

正直、最初は彼女を信用していなかった。どうせ俺の事をいつか失望するだろうと

……。俺を限界まで持ち上げておいて一気に落とすと、そんな感じがしていた。俺自身
が今まで裏切られた事はないが、それがどんなに怖い事なのかは知っている。

プリンツ「私はあなたのその勇気を汲み取ったのです！あなたならこの世界を救って
くれる！私達の世界を、深海棲艦や海異鬼の脅威に震える市民を救ってくれと！」

リク「プリンツちゃん……」

でもそう啖呵を切ったプリンツちゃんの純粹な瞳を見て、本当に俺の事を信じている
事に気がついた。嘘偽りない信頼を俺に寄せているんだ……。

プリンツ「陽炎型の皆さんも、ビスマルクお姉さまも、潮さんも皆あなたの事を信頼
しているはずですよ！だから自分を卑下する必要はないですよ！」

リク「……」

プリンツ「だから自分に自信を持ちましょ？ね？」

リク「……ありがとう」

プリンツ「それでこそリク君ですよ！」

リク「うわっ！」

すると突然ギュッと抱きつかれた。女子に抱き付かれるなんて初めての経験だ……。

プリンツ「私、あなたのことが大好きですよ！だから一緒に頑張りましょうね！」

リク「……おう！」

ここまで信頼されてちゃあ自分に自信を持たなきゃ男じゃねえ。俺はこの世界から二大勢力を駆逐し、そしてプリンツちゃんを絶対に守る。たとえどんな脅威が立ちほだかろうと。

リク「誰も見てないよね?今の……」

プリンツ「別に見られてもいいじゃないですか?」

リク「チラツ」

ふと右から視線を感じたためそつちを振り返る。

リク「……お前ら……そこで何してんだ……?」

??「ビクツ!」

リク「隠れてるつもりだろうが、バレてんぞ」

陽炎「不知火!黒潮!逃げるわよ!」

リク「あつ!こら!待ちやがれ!」

あいつら、その岩陰に隠れていたつもりだろうが、高さは数c m程しかないとあのがめれば隠れられるスペースではない。あれで隠れていたつもりだったのかよ。身をかめれば隠れられない事もないが……しかも3人ともカメラ持っていたな?まさか一部始終を撮影していた?だとしたらなんとしても止めねば!

陽炎「一部始終を撮らせてもらったわよ!」

リク「やっぱりかア！んじやあ尚更逃がすわけには行かないぞ！」
不知火「安心してください。これは私達だけの秘密にしておきますから」

黒潮「誰にも言わへんでえー」

リク「そういう問題じゃねえ!!!てか周りから聞かれてるわ!!!」
意味ねえじゃねえか！待ちやがれエエエ!!!

プリンツ「……私、リク君と出会えてよかったです♪」

23話 任命

リク「捕まえたぞ」

陽炎「うう……ビスマルクさんめ……」

さて、今何をやっているのかというと、俺とプリンツちゃんの様子を盗撮していたトリオにその動画を削除するよう求めている所だ。幸い、三人は見たことしか言っていないため追いかける道中にいた艦娘達は俺がプリンツちゃんに抱きつかれ大好きと言われた事は知らない。んでどうやって捕まえたかというと、ちょうど鎮守府前にビスマルクさんが立っており、彼女に三人が捕まったため結果御用となったわけだ。

リク「さあ、消してもらおうか」

陽炎「何よ。私達だけの秘密にするって言ってるじゃない」

黒潮「そうやで？誰にも口外はせえへんで」

不知火「私達を疑ってるんですか？」

リク「念のためだ！もしお前達がその動画を見てる途中に誰かが入ってきたらどうするんだ？」

陽炎「そんなもんすぐに隠せばいいわよ」

リク「聞いてくるかもしれないだろ？しかもしつこく」

黒潮「リ……リクはん……偉い必死やな」

不知火「顔が火照ってますよ」

リク「うぐぐ……」

そりやあ大好きって言われて抱き付かれた事を知られたらたちまち鎮守府中にその噂が満盈してしまう恐れがあるからな……。それだけはなんとしてでも阻止せねばなるまい！俺が鎮守府内を歩き回っている時に皆から注目されるのは正直恥ずかしすぎて耐えられない！だって俺前世ではコミュ障だったんだよ！？そんなもん当たり前じゃん！

リク「と……とにかく！今すぐ削除してくれ！お願いだ！」

陽炎「じゃあ私達の要求を受け入れたら削除してあげる」

リク「ほ……ほんとにか！？嘘つくんじやねえぞ！？」

陽炎「長い付き合いでしょ？少しは信じなさいって」

俺がここに来てからまだそんなに経ってないんだけどね。彼女達からしてみれば少ししか経ってなくてももう親友感覚なんだろう。

リク「分かったよ……それで要求は？」

陽炎「私達3人と一人ずつデート！」

リク「……」

……はっ？

リク「すまん、もう一回言ってくれ」

陽炎「だから、私たち3人と一人ずつデートよ！」

リク「マジで言ってるの？」

陽炎「冗談で言ってるように見える？本気よ」

ちよつと待て……。さっきプリンツちゃんから大好きって言われた後に3人と一人ずつデートって一夫多妻じゃねえか！あの子が俺に告白したかどうかは疑わしいけど、これって完全に浮気だよな!?しかも多数の女の子と密接な関係になるって近年のラノベでありがちな展開じゃねえか！

リク「マジかよ……」

黒潮「断ったら消すわけにはいかないで？」

不知火「削除して欲しいなら要求を受け入れるのです」

陽炎「さあ、どうする？」

ここで要求を断ったら動画は消されず、受け入れたら受け入れたでプリンツちゃんからの印象は最悪になる……。前者は皆に知られる恐れがあるし、後者はあの子に振られる可能性が極めて高い！しかもトリオとデートしている所を見られる事は避けられな

い！一体どっちを取ればいいんだ!?俺は今境地に立たされている!

リク「俺は……」

トリオ「ドキドキ」

リク「……受け入れ」

ガチャ

ビスマルク「リク君」

リク・トリオ「ッ!?!」

要求の有無を下そうとした瞬間、ビスマルクさんが部屋にやってきた。一瞬心臓が止まるかと思った……。

ビスマルク「……って何やってるの?」

リク「それは……その……」

陽炎「ト……トークしていたんですよ!」

黒潮「そ……そうやで!」

ビスマルク「随分とテンパってるようだけど……」

不知火「ただお話をしていただけです!」

ビスマルク「まあいいけど」

トリオ「ホッ……」

ま……まあ何はともあれ、危機は脱したみたいだ。

リク「どうしたんですか？」

ビスマルク「司令官が呼んでるわよ。今プリンツが部屋の外で待ってるわ」

リク「わ……分かりました」

トリオ「(まずい……今の聞かれてたかも……)」

何の用だろう。それにビスマルクさんがプリンツちゃんが部屋の外で待ってるって
言っていたな。もしかしてあの子も長門さんに呼ばれたのかな？

ビスマルク「何でも大事な話があるって言っていたわ」

リク「そうですか……」

とりあえずあの子を待たせるわけには行かないため、ここは部屋を出る事にするか。

陽炎「い……言ってらっしゃい」

リク「うむ……」

ビスマルク「(トリオったら、リクと密接な関係になろうと何かを持ちかけたわね)」

リク「やあ、待たせたね」

プリンツ「いえいえ」

リク「それじゃあ行くとするか」

プリンツ「はい！(ギョツ)」

うっ……やっぱり俺の手を繋いだか……。もうこれ誰かが通りすがったら確実に人になったって勘違いされてしまうぞ……。どうか誰も来ないでくれ……。

プリンツ「大事な話って何でしょうかね？」

リク「さあ……それは分からないな……」

プリンツ「もしかして、私とリク君が恋人になったから祝福してくれるのかも！」

リク「ええ……」

もう恋人に発展しちまつてるよ……。いくらなんでも進展が早すぎるだろ……。

リク「そ……それはないんじゃないかな……。あはは……」

プリンツ「？」

ああ……。あのトリオとのやり取りを聞かれてたら成す術ないな……。聞いてないことを祈るしかない……。

つとそうこうしている内に、長門さん達が待つ司令室の前にやってきた。

コンコン

リク・プリンツ「失礼しまーす！」

なんかハモったんだが……。息までぴったりとかもう訳分かんねえな……。

長門「入っついでいぞ」

ガチャッ

リク・プリンツ「失礼します！」

何気にまたハモった。

長門「来たな」

リク「はい」

プリンツ「呼ばれたとおりに」

長門「……」

リク「な……なんですか……？」

めっちゃまじまじと見つめられてる……。

長門「いや、最高のコンビかなと」

プリンツ「でしょでしょ！」

リク「そうですね……あはは……」

陸奥「クスッ」

やり辛いな……。

リク「そんなことより、何か大事な話が合って俺たちを呼んだんですよね？」

長門「あ、そうだった。コホン」

途端に長門さんが真剣な表情になる。

長門「リク、プリンツ。お前たちを艦隊全てのまとめ役に任命する！」

リク・プリンツ「えっ!？」

なんじゃそりゃあ!?俺まだここに来てから一ヶ月も経ってないんですけど!?それに数十回戦闘に参加しただけの下級戦士なんだけど!?プリンツちゃんはともかく、俺までそのまとめ役に任命するのはちよつとやりすぎだ!

長門「お前たちは二人で共に群れのボスを倒したそうじゃないか」

リク「そうですけど……」

長門「それによつてお前たちは皆をまとめるのにふさわしいと判断した次第だ」

プリンツ「はい!」

プリンツちゃん……やる気満々じゃないか。俺はもう突然のことで頭が混乱しちまつて声を上げる気にもなれない。

リク「わ……分かりました!頑張ります!」

プリンツ「任せてください!」

長門「うむ!頼んだぞ!」

陸奥「頑張つてね♪」

リク・プリンツ「はい!」

いきなり全ての艦隊をまとめろつて言われてもうまく行く気がしねえんだよな……。だつてほら、俺前世での学力が悲惨だったし、通つてた高校も偏差値の低い所だったし、

そんな俺が艦隊すべてのまとめ役に任命されても……ねえ……？統率力があるかどうかも疑わしい。まあ確かにあのデカブツを倒すのに子分共を足場にして接近したという攻略法を思いついたのは俺だけだよ。

その重大任務、ちやんとこなせるだろうか？まあ、プリンツちゃんと一緒なら大丈夫だよ。

24話 ただの日常

長門さんから艦隊全てをまとめるという重大すぎる使命を与えられた俺達……。今グラウンドでプリンツちゃんと共に予行演習を行っているところだ。

リク「えっと……。今日から全艦隊のまとめ役として俺たちが任命されたから、俺たちの言うことは聞くように……。かな？」

プリンツ「うーん……。最後のほうちよつと訂正しましょう」

リク「ん……。そうか」

プリンツ「全員指示にきちんと従うように……。のほうがいいと思います」

リク「分かった。コホン」

それでは改めて……。

リク「今日から全艦隊のまとめ役として俺達が任命されたから、全員指示にきちんと従うように！」

プリンツ「暁の水平線に勝利を刻めるよう、頑張りましょうね！」

これなら行けるか？ちよつと不安だな……。あとまとめ役として任命されたからには全員を的確に指揮していく必要もあるんだよね……。？これはこの世界に転生してか

ら一番大変な事だ……。ある意味敵と渡り合っている時よりも……。それに鼓舞ならともかく、艦娘をどこに配置させるか、どんな役割を任せるのかとか色々問われるよな……。？長門さんたちもここに着任して1ヶ月も経たない俺にそんな重大な使命を課させるとか鬼畜過ぎやしないかな……。

プリンツ「こんな感じですね」

リク「ところで、まとめ役つて一体何をすればいいんだ？」

プリンツ「大まかな役目はまず作戦会議の議長、鎮守府に敵襲が起こった時の艦隊の指揮、あとは先ほどの鼓舞ですね」

リク「会議の議長……。なんか議員にでもなった気分だ……。うまくこなせるかなあ……？」

プリンツ「大丈夫です！私がついてますから！」

リク「お……。そうだな」

まあ、不慣れなうちは彼女にサポートしてもらおう。第一水上打撃部隊の旗艦を務める彼女の知恵を借りるつもりでやるんだ。ただ、今は二大勢力の動きが活発になっていく以上かなり忙しくなりそうだが。下手すれば今夜敵襲があつて早速仕事があるかもしれない。まあ、あくまで推測だからな。フラグじゃないぞ？

プリンツ「今日のところは中に戻りましょうか」

リク「そうだな」

あ、やばい……。陽炎たちとのあの件のこと忘れてた……。

リク「……プリンツちゃん。君は先に部屋に戻っていてくれないかな？」

プリンツ「リク君？別にいいですけど、何か別の用事があるんですか？」

リク「うん……まあそんなところかな……」

プリンツ「……おかしな人」

とりあえずはバレてないようだ……。

プリンツ「じゃあ先に部屋に戻ってますね」

リク「おう」

さてと、陽炎達の部屋に行くか……。

トリオ「……」

ガチャ

リク「戻ったぞ」

陽炎「おかえり！」

不知火「用事はなんだったんですか？」

リク「いやまあ、艦隊すべてのまとめ役に任命されたよ」

黒潮「ほんまか!？」

リク「ああ……」

黒潮からすごい驚かれたが、まあ当然だよな。

リク「厳密にはプリンツちゃんと共に……だが」

陽炎「すごいじゃない!ここに着任してまだ1ヶ月も経たずにそんな役に任命するなんて大出世じゃない!」

リク「そりゃあすごいと思うけど、あの人も何気に鬼畜だぞ?まとめ役ってかなり重大な使命だぞ?」

不知火「なんでしよう?その使命に何か落ち度でも?」

リク「多少はある……」

黒潮「まああの人もリクはん達のことを見込んだんやろ。本来なら相当な経験がないとまずやらせてもらえないからな」

長門さんはボスを倒したことを見込んでその役に任命したと言っていたけど、はたしてそれだけでそれを務められるのだろうか?プリンツちゃんは旗艦を務めている上前の出撃の時皆を統率していたことからまとめ役にはふさわしいのだろうか、俺はボスを倒しただけだ。長門さんはどういう目で判断したのだろうか。

陽炎「そんなことより今はデートのことよ！」

リク「そうだったな……」

陽炎「どうする？ 要求を受け入れる？ それとも要求を拒否する？」

リク「悪いが、保留にしてくれないか？」

陽炎「保留……」

黒潮「どないする？」

不知火「リクさんはまとめ役に任命されてさぞ驚いているみたいですし、あまり課題を背負いすぎるのは彼にとっても負荷になるんじゃないですか」

リク「不知火……」

分かってるじゃないか。今の俺はまだ心の整理がっていないし、なによりもまとめ役に任命された事に関してもこれまたかなりのプレッシャーになっているからな。不知火の判断は正しい。あとは二人が保留を受け入れるかどうかについてだが……。

陽炎「仕方ないわね！ 今日のところは退いてあげる」

黒潮「動画は削除するで」

リク「ありがたい！」

俺の勝利……かな？

陽炎「でも気が向いたらまた誘うからそのつもりで！」

リク「わ……分かったよ」

デートのことはまだ諦めないみたいだな……。たくそんなことプリンツちゃんに聞かれていたらどうなることか……。

リク「じゃあ部屋に戻るわ」

陽炎「そんな事言わないで夕食の時間まで一緒に過ごしましょうよ！」

黒潮「これから浜風達を呼んで楽しい事をする予定なんや。だからリクはんも一緒にやろうや」

リク「ならプリンツちゃんを呼ぶため一旦戻るわ」

俺がプリンツちゃんを呼びに自室に戻り、その後彼女を連れて部屋に戻るとすでに浜風、鹿島、浦風、磯風、谷風、潮といういつものメンバーの姿があった。ビスマルクさんはああ見えていろいろ忙しいようで、今は長門さんの手伝いをしているらしい。まあ仕方ないか。また今度誘おう。

その後俺たちは夕食の時間まで色々とカードゲームをやって楽しんだ。ちなみに俺はカードゲームなどロクにやったことはなかったためボロ負けという結果に終わってしまった……。遊○王カードもほぼコレクションとして嗜んでいたし……。えっ？聞いてない？すまん。隙あらば自分語りしてしまったよ。

とまあその後、いつものように食堂に行き夕食を取る。

今日の飯ももちろんうまい。3杯くらいおかわりしてしまつたぜ。
陽炎「それじゃあまた後でね」

プリンツ「わかりました」

入浴の時間まで、部屋でゆっくりするとしましようか。

リク「お腹が膨れて眠くなってきたぞ……」

プリンツ「リク君。食後すぐ横になるのは体に悪いですよ」

リク「んなこと言われてもなあ、身体が勝手に動いてしまふんだよ」

プリンツ「どこぞのピエロですかあなたは……」

ほとんど見なくなつたな、あのピエロ。ある年を境に全盛期まで行つたその人気は段々とオワコンピエロと呼ばれて言つて下降していった。時の流れには逆らえないつてことか。艦これも時期にそうなつてしまふんだらうな。まあ、すでに今世の人生を歩んでいる俺にはもうどうでもいいことだが。

さてと、そろそろ入浴の時間だな。相も変わらず美少女だらけの入浴場に行き、そこで湯船に浸かる。

やっぱ慣れねえな……。だって女湯に一人の男が我が物顔で跋扈しているんだぜ？

一生慣れねえよこんなの……。元々コミュ障で女子ともまともに話せなかった俺が、今では堂々と美少女に囲まれて平然と入浴している……。あれ？これって慣れてるってこと？まさか……。でも俺がそう思うってことはそうなんだろうな。俺の中ではな。

慣れるまで何とか頑張っていこう。